



靖國神社みたままつり

平成20年7月13日宵の18時、神殿より鳴り響く大太鼓の音を合図に、一斉に点灯された大小3万個の懸け提灯や懸け雪洞が、境内各所や参道一面を明

るく照らし出して「みたままつり」の前夜祭は始まった。幽玄な中にも華やかな雰囲気を出し、大勢の参詣者で賑う靖國神社「みたままつり」は、今や都心で催される新暦の一大盆祭として定着しているが、昭和22年7月13

日、16日に、神社の正式行事として斎行されてから今年で満61年、62回目を迎えた。ところで靖國神社は来年、平成21年に御創立百四十年という節目の年を迎える。これは、明治2(1869)年6月29日、九段坂上の「招魂場」に仮設された急拵えの本殿と拝殿において斎行された第一回の「招魂祭」をもって神社の御創立とされているからである。その招魂祭は、前日28日の夜仮殿において清祓の儀が修せられた後、深夜、29日の午前2時に「霊招」の式が行われ、次いで午前8時から、明治新政府の大官、華族、各藩の代表者が拝殿前に着座する中、勅使の御差遣を仰ぎ、「副知官事」(軍務官副知事大村益次郎)が勅幣を拝受し、神前に納めて、勅使奉幣の儀を終えた後、祭主である「知官事」の宮(仁和寺宮嘉彰親王、後の小松宮彰仁親王)が再拝拍手して祝詞を奏上し、続いて参列者一同が拝

報 特 攻

平成20年8月

第76号

財団法人 特攻隊戦没者 慰霊平和祈念協会

〒105-0014 東京都港区芝 2-5-19TABビル

電話 03 (5730) 1016
FAX 03 (5730) 1017

http://www.tokkotai.or.jp
振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能
発行人 羽淵徹也
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

靖國神社みたままつり	1
靖國神社「みたままつり」に献納された懸け雪洞の、空挺特攻隊員の遺詠二点	3
靖國神社御創立百四十年記念事業	4
靖國神社崇敬奉賛会新会長	4

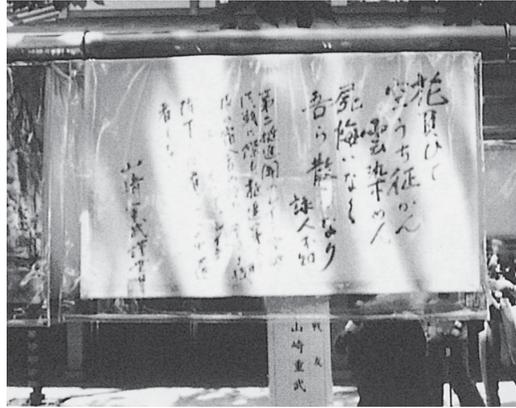
目次

昭和天皇とマッカーサー元帥	6
殉國沖繩學徒顯彰六十二年祭	8
逸題「危うい哉祖国」	10
沖繩第三十二軍司令部の最後を伝える参謀部付一少佐の文と絵	11
万世特攻慰霊碑	14
第37回慰霊祭	14
第54回回覧特攻基地戦没者慰霊祭	14
平成20年鹿兒島(鹿屋、枕崎)方面特攻慰霊の旅	16
義烈空挺隊碑前祭	17
碑は語る特攻隊⑦	19
陸軍挺進部隊銘々伝	20
平成20年度	20
豫科練雄飛会慰霊祭	22
朝鮮出身特攻隊員の碑	22
日本女性が故郷に建立	23
旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会	27
夢のような丸い虹を見た	27
靖國の途 Uターン記	28
世界に唯一現存する五式戦	33
ガダルカナルで散華した軍神若林東一偉勲顯彰	36
後世に伝える方策	36
演劇「帰って来た蜩」	39
暑中お見舞い	41
「特攻勇士之像」護国神社奉納運動第一期の終結報告と今後の運動の進め方について	41
お知らせ	43
事務局からの報告等	44

靖國神社「みたままつり」に献納された懸け雪洞の、空挺特攻隊員の遺詠二点

田中 賢一

献納者 山崎 重武



レイテ空挺作戦は、昭和19年12月6日に発起された。第一陣の挺進第三聯隊は、宿营地南サンフェルナンドの精糖工場を出て、発進飛行場アンフェレスに向かったのであるが、宿舎の壁にこの歌が掲げられていた。毛利義治衛生兵は、手帳にこの歌を写し取った。彼は、降下編成に洩れてルソン島で戦い、生き残って戦後帰還した。既に故

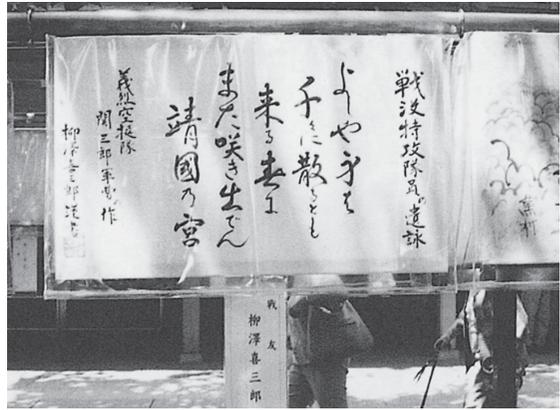
人であるが、生前このことを私に語ったので、この歌が世に伝わることになった。

この日降下した者に一名の生存者もない。

宮崎県川南町の護国神社の裏庭に、「空挺落下傘部隊発祥之地」と刻んだ大きい碑があるが、その土台にもこの歌を刻んである。



献納者 柳沢喜三郎

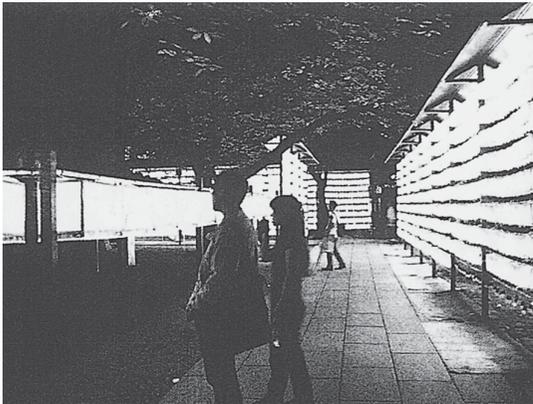


義烈空挺隊員の遺詠は沢山残っており、甲乙を付ける気はないが、この歌はよく思いが籠もっている。

関三郎軍曹は、奥山隊第一小隊の一員で、遺髪と遺爪を入れた封筒に、「大命降下勇躍征途に就きます。今までの重々の不孝は何卒御許し下さい。いさぎよく散る覚悟です。何も思い残すことはありません。」

よしや身は千々に散るとも来る春にまた咲き出でん靖國の宮」と。

当時の名簿には、「関三郎、長野県北安曇郡北村六四三三、父与助」となっている。



○靖國神社御創立百四十年記念事業への御奉賛と靖國神社崇敬奉賛会への御入会について

靖國神社では、平成21年に御創立百四十年という節目の年を迎えるに当たり、平成20年6月から次の記念事業を実施することとなり、崇敬者各位の御奉賛をお願いしております。

◇大手水舎屋根葺き替え工事

神門前左手にある大手水舎は、紀元二千六百年記念と支那事変の戦没者慰霊のため、在米の日本人兵役義務者会より昭和15年に奉納されたもので、既に70年近い歳月を経過しており、調査の結果、銅板屋根の老朽化と、それによる雨漏り等が確認されたので、その葺き替えを実施する。

◇能楽堂の改修

境内にある能楽堂は、明治維新後衰退し始めた能楽の保護のため、当時の華族多数が協力して明治14年、芝公園内に建築されたもので、その後明治36年、能楽会長土方久元伯爵のご尽力により、本殿北側の招魂齋庭に移設、奉納された。その際昭憲皇太后から金壺千円を御下賜されたことである。当時の能楽堂は、玉座、貴賓席等を完備した見所（観客席）を有し、毎年恒

例の皇族御催能、行啓能、慰霊演能のほか、国賓接待の場所ともなり、世界に誇る伝統芸能としての能楽の隆盛と英霊奉慰とに絶大なる貢献を果たしてきた。その後、昭和に入って大規模な合祀祭が続くようになり、招魂齋庭を拡張するため、境内北側の道路を隔てた飛び地境内に移設され、見所などの付属建物は設けられなかった。以後、戦中、戦後の一時期、荒廃に帰するかと危ぶまれていたところ、昭和28年に

発足した靖國神社奉賛会の事業の内、社頭整備復興事業の一つとして、再び現在の境内に移築され、能楽はもろろんと、広く英霊奉慰の芸能を演ずる建物としてその使命を果たしているが、建築後百三十年を経過し、東京で最古と言われる能楽堂であるため、銅板屋根の老朽化が進み、雨漏りのため、屋根裏その他建物全体の傷みや歪み等が確認され、改修の必要に迫られている。

◇「靖國教場」（仮称）の新築並びに相撲場の整備

靖國神社の「奉納大相撲」は、明治2年の御創立当初から大祭の奉祝行事として行われてきた伝統ある大相撲で、現在も春季例大祭に合わせて日本相撲協会により奉納されている。そのほか、社会人や学生による相撲大会などが年間を通じて開催されているが、

相撲場が現在の場所に移設されたのは明治37年のことであり、以来、百年余の歳月を経て場内観覧席などの崩壊が進み、また、昭和13年に建てられた力士の支度部屋も、老朽化による雨漏りや内外壁の傷みが著しく、相撲場全体の整備工事が必要な状態となっているが、その工事を実施する機会に、支度部屋を改築して、従来の力士控え室の機能に加え、参拝者の休憩や崇敬者各位、特に崇敬奉賛会青年部「あさなぎ」やボーイスカウトなど次代を担う青少年が「英霊のみこころ」を学ぶための各種勉強会、講習会、会議等多目的な利用も可能とする研修場の機能をも備えた二階建ての建物に改築する。

◇遊就館収蔵絵画の修復

遊就館には多くの文化的価値の高い歴史絵画を所蔵しているが、中でも特筆すべき大作の絵画に、矢田一嘯作の「元寇大油絵」（縦2.2m横2.7m）11点、下岡蓮杖作の油絵「箱館戦争図」「台湾征討図」（縦2m横5.7m）2点等があるが、損傷が著しくなっているため、補修すると共に軸装から額装に改修し、機会あるごとに展示公開するようにしたい。

以上の記念事業の総経費七億円の内、神社拠出金三億五千万円、崇敬奉賛会募金三億五千万円を予定し、本平

成20年度は、三億円を目標として募金活動を行うことに、去る5月25日に開催された靖國神社崇敬奉賛会の平成20年度定例総会において、今年度の活動方針として決定された。

なお、崇敬奉賛会の会員数は、七万二八四六名で、前年比二九一九名の減となっているので、記念事業への奉賛と同会への入会を兼ねて依頼することとして、会員の増加を図り、今年度は九万名を目標とすることになった。

記念事業御奉賛金・一口金五千元
募金期間・平成22年3月末日まで
お問い合わせ先
〒102-8246

東京都千代田区九段北3-1-1
靖國神社崇敬奉賛会事務局
電話03-3261-8143

○靖國神社崇敬奉賛会会長に前参議院議長長扇千景氏が正式に就任

去る4月3日逝去された前靖國神社崇敬奉賛会会長久松定成氏の後任として、前記の平成20年5月25日に開催された同会平成20年度定例総会において前参議院議長長扇千景氏が満場一致で選出され、第三代会長に就任された。

現在の靖國神社崇敬奉賛会は平成10年12月に設立されて以来、本年は十周年の節目の年を迎え、また、靖國神社御創立百四十年を来年に控えて、記念事業等奉賛の初年度に当たり、初の女性会長を戴くことになった。もとより適任であると共に、若くして散華した英霊の母親代わりとしての意味合いも込めて、悠久なる慰霊顕彰のため、次世代の若い人々をも含めて会員の増強と事業の充実を図るためのリーダーシップを発揮されるよう期待してやまないところである。



次に扇新会長の「会長就任の誓願」並びに「新会長就任挨拶」の各一部を掲載させていただくことにする。

◇会長就任の誓願（抄）

「・・・我が国は敗戦のショックから見事に立ち上がり、目覚ましい復興を成し遂げ世界に誇る経済大国へと躍進をして来たのであります。その一

方で様々なニュースや事件等が氾濫する今日の世情の変容は、私たちに物質的な豊かさや引き換えに、とても大切なものを喪失して来てしまっていることを示唆するものであります。それが何かと申せば、疑いもなく我が国の伝統的な道義・道徳心にはかなりまさん。歪んだ戦後教育により自己中心的な価値観に支配され続けてきた現在の社会を正常化することは、並大抵でないことも十分承知いたしております。しかし、その責務を全うすることが政治の大きな使命であります。長年国政の場に身を投じて来た私といえども、怯懦たる思いがございませぬ。

戦後六十有余年が過ぎ、いわゆる戦前・戦中派の方々が益々ご高齢となる中で、靖國神社や英霊の慰霊顕彰の將來は大変険しい過渡期にさしかかっているものと認識しております。これを戦後世代へ確実に引き継ぐためには、今だからこそ成すべきことが極めて多いのではないかと感じております。国家存亡の危機に際し、克己・献身の精神で尊い生命を捧げられた英霊の方々を御心を思うとき、靖國神社にこれからの日本を支える精神的支柱としての大きな役割があるものと確信をいたしております。その靖國神社崇

敬奉賛会の会長を拝命するという重責に身も震えるばかりでございますが、この上は、山内・久松両会長様の築かれた足跡を大切に踏襲し、副会長様はじめ役員各位とともに本会の目的遂行のため誠心誠意努めさせていただき所存でございますので、何卒宜しくご教導の程をお願い申し上げます。任の誓願とさせていただきます。」

◇新会長就任の挨拶（抄）

「・・・靖國神社のことは、私が政界で為し得無かったことでもありません。たし、また、今の日本の現状を憂いている国民の一人として、歳は取りましたけれども、お陰様で今は元気です。この人生の余力というものを何処に使うべきかと考えました。」

就任前にある方から「靖國神社に祀られている多くの神霊の中には、若くして人生の喜びも知らず散っていった多くの若者がいる。家庭も持たず、妻も、もちろん子供も持たないで散っていった。天皇陛下万歳と言って散華された方々も多くいたけれど、若者の多くはお母さんと言って散っていった」というお話を伺いました。

ですから、この会の会長が女性初ということも、何の人生の楽しみも知らず、ただ、お母さんと言って散っていった、

た、そういう若い神霊たちの為に、お役に立つこともあるのではないかと思っております。日本は戦後の教育の中にあっても、これほどに素晴らしい国になりました。六十三年前に、現在の日本を想像した人が果たしてあったでしょうか。誰もいません。政治家だってそうです。こんな素晴らしい日本になるとは想像もしませんでした。

しかし、一方、何故今これだけ平和を享受できるのか、何故これだけ豊かな日本になっているのかということに、報恩感謝もせず、これが当然だと思っている若者が多いのも事実です。私も、このことを憂いている母親の一人でございます。

ですから、何としてもこの靖國の尊さ、国の基本はここから始まっているのだということを、今一度、これからの若者たちに感じて欲しい、また、思い起こして欲しい。

そういう意味で、私は今回の大役を仰せつかり、日本の将来のあるべき姿や、その原点は、ありがとうと感謝をする、礼をすることから始まるという、日本人の素晴らしいDNAを今一度呼び起こすお手伝いをさせていただきたいと思ってお引き受けいたしました。」

昭和天皇と

マッカーサー元帥

(重光 葵元外相の帰朝報告談)

間もなく終戦記念日を迎える。毎年8月15日、靖國神社境内において、日本会議と英霊にこたえる会との共催により行われる「戦没者追悼中央国民集会」で拝聴する昭和天皇の玉音放送「大東亜戦争終戦ノ詔書」は、その度に感動で身の震える思いがするのであるが、昭和天皇は8月14日、皇居内地下壕で開かれた御前会議において、ポツダム宣言受諾決定の御聖断を下された時から、「・・・自分はいかにならうとも、万民の生命を助けたい。この上戦争を続けては、結局我が邦がまったく焦土となり、万民にこれ以上苦悩を嘗めさせることは私としてじつに忍び難い。祖宗の霊にお応えできない。・・・日本がまったく無くなるという結果にくらべて、少しでも種子が残りますれば、さらにまた復興という光明も考えられる。・・・」と仰せられたという。この御決意の下に昭和20年9月27日、昭和天皇は米大使館にマッカーサー元帥を訪問された。その時の陛下のお言葉とお人柄に感動したマ元帥が、その10年後に会見した重光 葵

外務大臣に率直に語っている。そのことが「昭和30年9月14日(水曜日)の「讀賣新聞」朝刊(14版)に、同年9月2日にニューヨークでマッカーサー元帥と会談した重光 葵元外相の帰朝報告談話として掲載されているが、マ元帥の昭和天皇に対する尊敬の念をよく表していると思われるので、ここに再録する。

(飯田 正能記)

◆ ◆ ◆
天皇陛下を賛えるマ元帥

重光 葵

◆ ◆ ◆
新日本の産みの親◆ ◆ ◆
御自身の運命問題とせず

私の渡米中最も印象深かったマッカーサー元帥との会見の様を少しばかり御披露申し上げます。

九月二日ニューヨークにおいて午前十時半、十年前のこの日を思い出でつつ加瀬国連大使と共にマッカーサー元帥の住んでいるホテル、ワードルフ・アストリアの玄関先に着きました。

(編注・昭和20年9月2日、当時の重光葵外相は、参謀総長梅津美治郎大將と共に日本全権として、東京湾内の米戦艦ミズリー号上で、降伏文書に署名した。その時の思い出が、中央公論社刊『昭和之動乱』に以下のように掲載されている。「式場は、すでに敵側の

見物人や、新聞記者や写真班で一杯であった。日本人新聞記者の知り合いの顔も見えた。シンガポールで降伏したパーシヴァル英將軍や、バタン半島で降伏したウェーレンライト米將軍等も、参列員の中に特に列んでおった。所狭きまでに満たされていた式場に向い合った後に、マッカーサー総司令官が出て来て、直ちに演説を始め、戦いの終結したことを宣言し、降伏文書に署名を求めた。

まず、記者(重光)が署名を終り、

次いで梅津大將も同様署名した。マッカーサー総司令官は、日本側の降伏を受け入れる意味で署名し、次いで各国代表が同様署名した。米国の代表者は、海軍のニミッツ提督で、英国代表はフレーザー提督であった。ソ連や支那の代表者も参加した。

珍しい天気で、ミズリー号甲板の上京湾上に聳えて見えた。開戦当初、シンガポール近海で撃沈された、プリンス・オブ・ウェールズ号の姉妹艦ジョージ五世号も、銀色のスマートな巨体を浮かべていた。」

元帥の副官であったホイットニー將軍やスクリップ・ハワード通信の主、ロイ・ハワード氏らに迎えられた。間もなくエレベーターで元帥のアパートを昇る。有名なワードルフ・アストリア・ホテルのタワー(塔)の一角である。アパートの入口まで出迎えられ堅く私の手を握った元帥の全身は興奮のあまり震えている。腕組みしながら私を自室に導いてソファアの上に座をすすめ、自分はその側のイスについた。広大な応接室の壁には日本の屏風(びょうぶ)が一双飾りつけられている。室内は全部日本時代に贈られた大小の品物で満たされている。両陛下のご進物とも思われる銀の御紋章入りの花ビンも目に映った。

【重光】「あなたはわれわれの最初の会見を記憶しておられるか」

【マック】「記憶するどころではない。それは横浜税関であったではないか。それ以来世界には多くの出来事があった。しかしいずれも日本にとっては総て成功の源となり、日本国民の信用を築き上げるためのものとなった。私は戦争裁判には終始反対であった。特に天皇を裁判に付することには絶対的に対した。もしさようなことをすれば占領軍はおお百万の増援を必要とする」と論じたのであった。幸いに自分の抗議はいれられた」と元帥は答えた。

当時横浜税関がマッカーサー司令部にあてられていたのである。元帥は今

その建物の中で当時の外務大臣たる私と重要会見をした事を思い出しているのである。九月二日降伏文書の署名が済んでからマッカーサー元帥は日本全域に対して軍政の布告を発して日本上下をして震駭(しんがい)せしめた。私は大変な事が起きたのであるから直ちに元帥に会見して軍政布告を取り消し、占領政治は天皇及び日本政府を通じて行うべき事を交渉するため当時の終戦事務局長岡崎勝男氏を随え翌三日早朝、総司令部の横浜税関に乗り込んだのである。その時私は日本天皇の平和に対する伝統的思召しを説き天皇を排除し日本政府を否認しては日本の占領政治に成功することはできないことを強調して軍政布告を取り消さんことを求めたのである。元帥が私の要請に応じて軍政布告を取り消した勇断は占領政治をして成功せしめた基礎を造ったといつて差し支えない。(当時のことは『昭和の動乱』下巻三〇一ページ以下に出ている)

伝えてもらいたいとのことであった」【マック】「自分は日本天皇の御伝言を他のなによりも喜ぶものである。私は陛下に御出会いして以来戦後の日本の幸福に最も貢献した人は天皇陛下なりと断言するに憚(はばか)らないのである。それにもかかわらず陛下のなされたことは未だかつて十分に (adequately or fairly) 世に知られて居らぬ。十年前平和再来以来欧州のことが常に書き立てられて陛下の平和貢献の仕事が十分了解されていないうらみがある。その時代の歴史が正當に書かれる場合には天皇陛下こそ新日本の産みの親であるといつて崇められることになると信じます。

私には戦前には天皇陛下にお目にかかった事はありません。始めて御出会いはしたのは東京の米国大使館内であった。どんな態度で陛下が私に会われるかと好奇心をもって御出会いしました。しかるに実に驚きました。(much to my surprise) 陛下はまず戦争責任の問題を自ら持ち出されつぎのようにおっしゃいました。これには実にびっくりさせられました。(to my utter astonishment) すなわち『私は日本の戦争遂行に伴ういかなることにまた事件にも全責任をとります。また私は日本の名においてなされたすべての軍事指揮官、軍人および政治家の行為に對しても直接に責任を負います。自身自身の運命について閣下の判断が如何様のものであろうとも、それは自分には問題でない。構わずに総ての事を進めていただきたい。(go ahead) 私には全責任を負います』これが陛下のお言葉でした。私はこれ聞いて興奮の余り陛下にキスしようとした位です。もし国の罪をあがのうことが出来れば進んで絞首台に上ることを申出るといふこの日本の元首に對する占領軍の司令官としての私の尊敬の念はその後ますます高まるばかりでした。

陛下は御自身に對してはまだかつて恩恵 (favour) を私に要請した事はありませんでした。とともに決してその尊厳を傷つけた行為に出たこともありませんでした。(never lost his great sense of dignity) どうか日本にお帰りの上は自分の温かい御あいさつと親しみの情 (warm personal greetings and friendship) を陛下に御伝え下さい。その際自分の心からなる尊敬の念をも同時にささげて下さい。(in expression of my personal esteem)」【重光】「それは必ず御受合い申上ます」以上が私がニューヨークでマッカーサー元帥と再会した時に元帥が天皇陛下の思い出を興奮した態度で私に話したものを、当時同席したロイ・ハワード氏が速記していた記録に照らし合わせたものである。私はこれを聞いた時はほんとうに感激した。終戦の当時戦犯の問題はもちろん追放の問題まで大騒ぎであった。その空気の中で天皇陛下は少なくとも親らをかばおうとはせず戦争に對する国家国民の行動については如何なることも全責任を取る事を敵將に明言されたのである。その大御心は真に天日の如く世界を照らしておるといふべきである。私のこの言葉は旧式の感傷の言葉ではなく歴史上の事実に對する感激の言葉である。この歴史的事実は陛下御自身はもちろん宮中からも今日まで少しももたらされたことはなかった。それがちょうど十年経った今日当時の敵將占領軍司令官自身の口から語られたのである。私は何というすばらしいことであるかと思つた。われわれはなお日本民族の伝統を保っている。今日も君民一体、一君万民と古い言葉があるが、日本民族のうるわしい姿をマッカーサー元帥の口から聞き得たという感激をもってワードルフ・アストリア・ホテルを正午近く辞去したのであった。

【重光】「東京出発前那須御用邸で天皇陛下に拝謁した際陛下は『もしマッカーサー元帥と会合の機もあらば、自分は米国人の友情を忘れた事はない。米国との友好関係は終始重んずるところである。特に元帥の友情を常に感謝してその健康を祈っている』と

伝えてもらいたいとのことであった」【マック】「自分は日本天皇の御伝言を他のなによりも喜ぶものである。私は陛下に御出会いして以来戦後の日本の幸福に最も貢献した人は天皇陛下なりと断言するに憚(はばか)らないのである。それにもかかわらず陛下のなされたことは未だかつて十分に (adequately or fairly) 世に知られて居らぬ。十年前平和再来以来欧州のことが常に書き立てられて陛下の平和貢献の仕事が十分了解されていないうらみがある。その時代の歴史が正當に書かれる場合には天皇陛下こそ新日本の産みの親であるといつて崇められることになると信じます。

私には戦前には天皇陛下にお目にかかった事はありません。始めて御出会いはしたのは東京の米国大使館内であった。どんな態度で陛下が私に会われるかと好奇心をもって御出会いしました。しかるに実に驚きました。(much to my surprise) 陛下はまず戦争責任の問題を自ら持ち出されつぎのようにおっしゃいました。これには実にびっくりさせられました。(to my utter astonishment) すなわち『私は日本の戦争遂行に伴ういかなることにまた事件にも全責任をとります。また私は日本の名においてなされたすべての軍

以上が私がニューヨークでマッカーサー元帥と再会した時に元帥が天皇陛下の思い出を興奮した態度で私に話したものを、当時同席したロイ・ハワード氏が速記していた記録に照らし合わせたものである。私はこれを聞いた時はほんとうに感激した。終戦の当時戦犯の問題はもちろん追放の問題まで大騒ぎであった。その空気の中で天皇陛下は少なくとも親らをかばおうとはせず戦争に對する国家国民の行動については如何なることも全責任を取る事を敵將に明言されたのである。その大御心は真に天日の如く世界を照らしておるといふべきである。私のこの言葉は旧式の感傷の言葉ではなく歴史上の事実に對する感激の言葉である。この歴史的事実は陛下御自身はもちろん宮中からも今日まで少しももたらされたことはなかった。それがちょうど十年経った今日当時の敵將占領軍司令官自身の口から語られたのである。私は何というすばらしいことであるかと思つた。われわれはなお日本民族の伝統を保っている。今日も君民一体、一君万民と古い言葉があるが、日本民族のうるわしい姿をマッカーサー元帥の口から聞き得たという感激をもってワードルフ・アストリア・ホテルを正午近く辞去したのであった。



殉國沖繩學徒顯彰六十三年祭

平成20年6月23日(月) 15時20分から靖國神社において「殉國沖繩學徒顯彰六十三年祭」が厳肅に斎行された。元国士館大学教授金城和彦先生を代表とする「殉國沖繩學徒顯彰會」の主催によるものである。

6月23日は、沖繩「慰霊の日」である。沖繩戦最後の激戦地となった糸満市摩文仁の丘の平和祈念公園では、沖繩県の主催による「沖繩全戦没者追悼式」が、福田康夫首相、仲井真弘多知事、遺族ら5670人が参列して盛大に執り行われた。仲井真知事は、平和宣言の中で「戦争の記憶を正しく伝えること、二度と戦争を起こしてはならないと確認し続けることが沖繩の原点である」と訴えた。

平和祈念公園内の「平和の礎」に刻まれた全戦没者の刻銘は、今年128柱が追加されて総数24万734柱に達した。この数は、沖繩本島における陸海軍の戦死者及び沖繩作戦中の特攻戦死者、一般住民の戦没者も含めた数に

事例がほとんどである。

今日、沖繩戦は、多くの住民を巻き込んだ無謀な戦闘と評価付けられ、住民の犠牲の面を強調する風潮が強いが、圧倒的に不利な状況下にあつて、将兵はよく勇戦敢闘し、官民また率先協力してよく奮闘し、身命を賭した3箇月にわたる抗戦により、本土防衛のための防波堤としての重任を全うした、その尊い英霊の顕彰とその史実の継承こそが大切なのではないか。

戦後63年を経た今日なお現地沖繩の人々の心には強烈な思いが染み込んでおり、この日現地の慰霊追悼行事は、摩文仁だけではなく、各地の慰霊碑、就中、各従軍学徒の碑でも行われているが、中央における沖繩戦戦没者慰霊行事が、唯一、靖國神社における本顕彰祭であるのは、些か寂しい思いがする。ましてや、マスクミがこれを報道することも無い。

沖繩戦は、正に軍官民一体の総力戦であった。牛島満軍司令官の率いる第32軍は、19年11月、3個師1旅のうち精鋭第9師団を台湾に抽出され、兵力

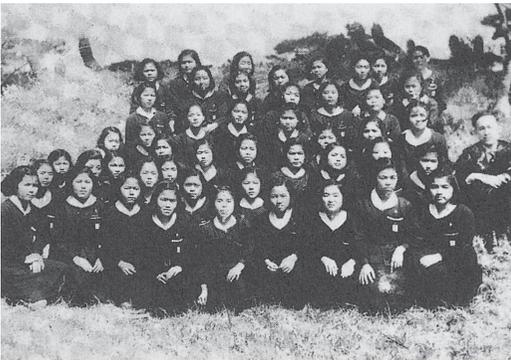
なるが、マスクミが報道するのは、戦争の犠牲となつた一般住民の

補充のため17歳から45歳までの男子の軍務徴集の外、中学校生徒を動員して「鉄血勤皇隊」を組織し、女学校生徒は「従軍看護隊」に編成して、敵上陸時の戦闘隊員に投入した。中学3年生以下の下級生は通信隊員として、上級生は勤皇隊員となつて軍事訓練につき、20年3月には沖繩師範男子部、県立第一・第二・第三の各中学、同工業・農林・水産、市立商業、私立開南中学の9校から1660余名が「鉄血勤皇隊」に編入され、半数は第一線の戦闘に、半数は野戦築城に従事した。4月1日の米軍上陸以来、これらの少年兵が、爆雷を抱いて米軍戦車に体当たりを敢行する壮烈なる光景が各地区の戦場で見られたが、5月中旬、首里城の急を救おうとして「学徒斬り込み隊」が志願編成され、50余名が一体となつて敵陣に突入し、壮烈な戦死を遂げた事実はその代表的なものであった。女子学徒の場合は、「ひめゆり学徒隊」として有名であるが、それは沖繩師範女子部と県立第一高女を「姫百合学舎」と呼んでいたのに因んだもので、その外、県立第二高女の「白梅学徒隊」、同第三高女の「名護蘭学徒隊」、同首里高女の「瑞泉学徒隊」、私立昭和高校の「梯梧学徒隊」、私立積徳高女の「積徳学徒隊」の7校から動員された従軍

看護婦は総数約550名に及び、各戦線において、弾丸雨注の中、健気にも身を挺して負傷兵の看護に当たり、幾多の悲痛なる哀話を綴つたが、中でも6月18日には、陸軍病院は解散となり、女学生の動員も解除されたので、伊原の洞窟にあつた第三外科病院では、女学生が従軍服を脱いで学生服に着替へ、解散式を済ませた瞬間、米軍の急襲馬乗り攻撃が加えられ、全員殆ど脱出の余裕なく、一挙にうら若き女学生27名の命が奪われた悲劇もあつた。その他戦死した女学生の数は動員数の45%250余名を数えた。男子部の44%と共に動員学徒の約半数が尊い命を国に捧げて戦死した。誠に痛恨の極みである。

本顯彰會では、昭和32年以来毎年、靖國神社において、これら沖繩殉國學徒の慰霊顯彰祭を斎行して今年第52回目を迎えた。遺族や関係者の高齢化に伴い、参列者も漸減しているが、それでも約60名の参列者のうち、約三分の一程の学生や若者など志を継ぐ者のいることは一筋の光明である。

祭典は、国歌斉唱、修祓の儀、獻饌の儀、齋主祝詞奏上と進み、祭文奏上となつたが、この度は、國學院大学文学部二年生大村篤志君が奏上した。沖繩戦で散つた若き学徒達の壮絶な



戦の庭に趣きし在りし日の乙女たち

(飯田正能記)

戦いの真相、それは彼らの祖国愛と家族愛に発するものであることを正しく語り継ぎ、深く感謝し、それらを守らんとために命を捧げた、その志を受け継ぎ、愛国の至情を培い、平和を守っていかなくてはならない、との決意を述べた。次いで、献楽として、「海ゆかば」の独唱、奉納吟「嗚呼 沖縄戦の学徒隊」の今様・漢詩・和歌の吟詠、合唱「沖縄県立第一中学校校歌」「沖縄師範学校女子部・沖縄県立第一高等女学校校歌」「故郷」の歌が奉納され、最後は「海ゆかば」の吹奏裡に、参列者一同昇殿参拝して、祭典を無事終了することができた。

◇ ◇ ◇
○師道の神髄

沖縄戦では、教職員もまた弾雨の中に身を挺し、率先垂範、終始生徒の陣頭に立って教育の道に殉じて逝った。自らの生命をもって師道を示したその尊い姿は、わが国の教育史に特筆大書して、後世における教育者の心に深く留めなければならぬものと思う。

師道に殉じた教職員は、沖縄師範学校男子部19名(野田校長を含む)、同県立第一中学校20名、同県立第二中学校7名、同県立第三中学校2名、同県立水産学校7名、開南中学校4名、同師範学校女子部7名、同県立第一高等女学校8名、同県立第二高等女学校11名、積徳高等女学校5名、昭和高等女学校5名、合計95名である。

○嗚呼、野田貞雄学校長

昭和20年3月31日、球一〇一五八部隊に師範隊が入隊したとき、野田貞雄沖縄師範学校校長は陸軍嘱託(高等官三等待遇)に任ぜられ、第三十二軍参謀部勤務を命ぜられたが、そのとき参謀部は、野田校長に対し、軍司令部の壕(この壕は、首里城の地下深く、幅四、五米、総延長千米を超える坑道を縦横に掘りめぐらして構築され、壕内には、軍司令官牛島閣下をはじめ長参謀長の室のほか、作戦室、医务室、通

信室など千五百名の将兵を收容する各種の室が設けられ、すみずみまで見々と電灯がともされ、換気通風装置まで備えられた完璧なもので、出入口は5カ所有り、その第一の入口には、長勇参謀長の筆で、「天の岩戸戦闘指令所」と筆太に書かれた木札が掲げてあった)に入るよう何回となく勧めた。しかし野田校長は、「御好意は有り難いが、校長として生徒の許を離れるに忍びない。私は最後まで生徒と共に行動したい。」と、その度に参謀部の勧めを断り、生徒のいる留魂壕に起居した。

壕内において、校長は常に生徒の士気昂揚に努め、或る時は古人の武勇伝を語り、或る時は青春時代の懐古談に一夜を明かし、或る時は生徒と共に虱取りに熱中し、或る時は陣中日誌を夜の更けるのも忘れて綴ったりした。

そのうちに戦況は急迫して、四月中旬からは、生徒たちも第一線に投入されるようになり、そして戦死した生徒名が留魂壕に報告されてきた。

その度に、野田校長は端坐冥目して、その死を悲しみ、現場に急行して埋葬に立ち会うなど、生徒にとっては慈父のような校長であった。

それだけに学校長の指示があると、生徒たちは喜び勇んでその指示に従い、弾雨の中でも我先に飛び出して

行った。

五月下旬の摩文仁への撤退の際も、暗夜の中を折柄の雨に濡れ、ぬかるむ泥道に足をとられながら、飛来する敵弾を物ともせず、疲労の色も見せず、常に生徒の陣頭に立って鞭撻、敢闘した。

摩文仁到着後は、日を追って戦況は悪化したが、校長は、芋蔓や蓬などを主食にして、或る時は水浸しになった壕で、或る時はわずかに残った石蔭で、生徒と共に終始戦い抜かれた。

六月二十日、軍司令官の命に従って敵中を突破すべく、二、三名の生徒と壕を出られたが、ついに不帰の人となった。

最後の様子については、敵陣に突入したという説もあり、また自刃されたという説もあるが、いずれにしても同道した者が全員戦死しているの、詳細については不明である。

思えば師範隊が、祖国の栄光を信じ、意気天を衝くの気概をもって、われに百倍する敵を迎え、最後まで勇戦敢闘したのは、これ偏に学校長の垂範、徳化があったからこそで、まさしく野田貞雄校長は、師道の神髄を發揮されたものと言うべきである。

(金城和彦先生の著書より)

逸題

—危うい哉祖国—

田中 賢一

○沖繩県の慰霊行事に参加した

福田首相のこと

6月23日は沖繩慰霊の日で、現地では摩文仁の会場で県知事主催の盛大な「沖繩戦全戦没者追悼式」が行われた。新聞の報ずるところによれば、臨席した福田首相は、挨拶で次のとおり言つたという。「沖繩戦では20万人もの方々の尊い命が奪われた。県民の筆舌に尽くし難い苦難に胸ふさがる気持ちを感じ得ない云々」と。

この挨拶文を起案した官僚は、20万という数字はよく調べて取り上げたのである。事実、公刊戦史によれば、地上戦闘で戦死した軍人は6万5千、現地の住民の死者数は10万となつており、それに本土から出撃した特攻隊等を加えれば、20万を超すと思われるので、誤りではない。しかし、その内容を首相は知っているのか。知つていて、20万もの方々の命が奪われた、と言うのは何事か。散華した特攻隊員に対して、命が奪われたとは無礼ではないか。また、軍に従つた殉國学徒の精神を踏みにじるものではないか。両者の気持ち

ちを端的に表した遺書を掲げてみよう。

★大石政則少尉は、東京帝国大学法学部二年在学中に学徒出陣で海軍に入り、第十四期飛行予備学生となり任官、八幡神忠隊に属し、20年4月28日、九七艦攻に搭乗して申良を発進、那覇近海の敵艦船に突入散華した。彼が母親に宛てた遺書の一節、

「二三〇発進、沖繩周辺の敵輸送船に対し痛快なる突入を決行します。仮令途中で撃墜されることがあつても、戦果はなくとも、二十代の若武者が次から次へと特攻攻撃を連続し、ますらをの命をつみ重ねつみ重ねして、大和島根を守りぬくことができれば、幸いではありませんか」

特攻の御霊は、命を奪われたと言われたことに、怒り給うであらう。

純正日本人の気持ちを深刻に理解するため、大石少尉の母親（平成2年、96歳）の手記がある。主題から離れるので、最後に書いてある歌だけを掲げておく。

「はろばると来し方願れば天かけし
白マフラーの子の笑顔顕つ」

★次は戦没学徒の御心について、

沖繩第二高等女学校「白梅学徒隊」の戦死した大嶺美枝生徒の遺書
「お母様 いよいよ私たち女性も、学

徒看護隊として出勤出来まますことを、心から喜んでおります。

お母様も喜んで下さい。
私は「皇国は不滅である」との信念に燃え、生き伸びて来ました。軍と協力して働けるのはいつの日かと待つておりました。いよいよそれが私達に報いられたのです。何と私達は幸福でせう。大君に帰一し奉るに当つて、私達は最もいい機会を与えられました。しっかりとやる心算でおります。（中略）散るべき時には立派な桜花となつて散る積りです。その時は家の子は「偉かった」と賞めて下さい。（以下略）

殉國学徒の人達も、命を奪われたなどと言われては心外であらう。



県立第二高等女学校（白梅学徒隊）の生徒たち

○「孫子」の教える所

「夫レ将ハ国ノ輔ナリ。輔周ケレバ国必ズ強ク、輔隙アレバ即チ国必ズ弱シ。故ニ君ノ軍ニ患ウル所以ノ者三アリ。軍ノ以テ進ム可カラザルヲ知ラズシテ之ニ進メト謂ヒ、軍ノ以テ退ク可カラザルヲ知ラズシテ之ニ退ケト謂ウ。三軍ノ事ヲ知ラズシテ三軍ノ政ヲ同ジウスレバ、即チ将士惑ヒ、三軍ノ権ヲ知ラズシテ三軍ノ任ヲ同ジウスレバ、即チ将士疑ウ。三軍既ニ迷イ且ツ疑エバ即チ諸侯ノ難至ル。是レ軍乱シテ勝チヲ引クト謂ウ。」

ここに君とあるのを内閣総理大臣、防衛官僚と置き換えて読めばよい。「三軍の事を知らずして三軍の政（方策）を同じ（将軍と同じ）うすれば将士（将校）惑う」彼らが戦略戦術の片鱗すら知っているとはいえない。また、学ぼうとしたとは聞いていない。それでクラスタ爆弾禁止条約に加盟するとは、長い海岸線を持つ我が国にとってこの爆弾は、兵力を補う有効な兵器なることが判らぬのか。

殷鑑は少々遠いが、楠木正成を湊川で戦死させた公卿坊門清忠の如き、長袖者では国防は全く出来ぬ。

沖縄第三十二軍司令部の最後を伝える参謀部付一少佐の文と絵

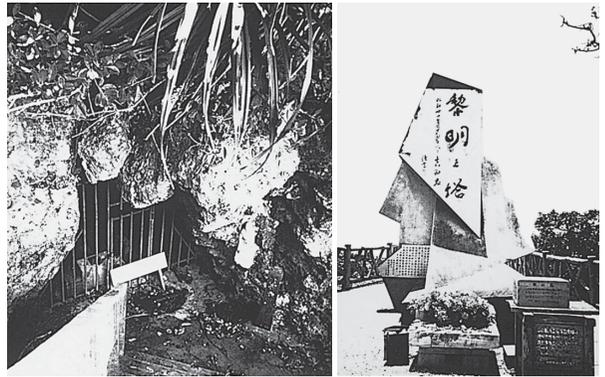
田中 賢一

一少佐とは私の同期生の西野弘二君である。彼は歩兵から戦車に転科し、戦車では戦闘部隊よりも装軌車整備の部隊にいたことの方が長かった。そのような経歴を生かすため、飛行場基地設定練習部に転属となり、飛行場設定の研究と教育に従事した。

20年3月沖縄の第三十二軍司令部付に発令されて赴任した。沖縄では既に飛行場建設どころではなく、敵に占領されても使えないようにすることを考えなければならなくなっていた。そのような訳で参謀部の一員として働くことになった。

6月23日、軍司令官と参謀長が自決するまで司令部の洞窟におり、その後参謀長から命ぜられていた通り、便衣をまとって洞窟を脱出し、国頭に向かい潜行したが、何日か経って捕らえられ、軍人であることを見破られて捕虜となり、戦後帰還した。既に故人であるが、貴重な体験を『紅焔』と題する本に書き残し、また、油絵を能くし、銀座で個展を開いたこともあった。

現在、摩文仁山頂の軍司令部跡には碑が建っており、洞窟の中には入れな



いが、入口だけは見ることができ。ここには洞窟の入口以外往時を偲ぶものは何も残っていないので、西野の文と絵をもって悲惨な状況を想像してみよう。文は『紅焔』の抜粋である。絵は個展に出した油絵であるが、白黒印刷では真情が汲み取れない。

「六月十八日、最後の命令が発せられ、軍の統一指揮はとかれ、各兵団、各々現配備に於いて死闘すべきを命ぜられた。無我夢中の三カ月、想像もしていなかった事態だ。同夜二〇〇〇頃、軍司令部壕では十三名相会し、最後の晩餐が開かれた。両将軍、八原、

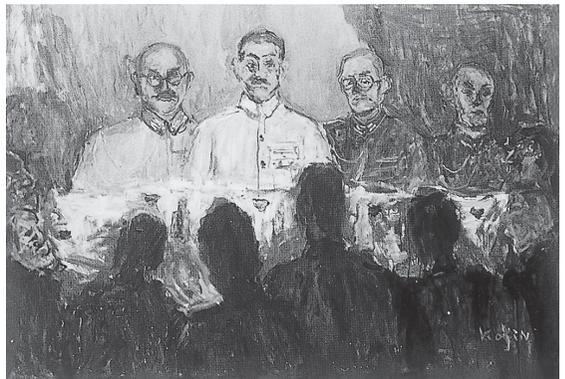
木村、葉丸、三宅、長野の各参謀、島野、坂口、吉野、真崎の各副官、参謀部付松原少佐と私、狭い鍾乳洞の陸地側入口近く、今迄参謀達が作戦室代わりに使用していた場所に、一同相会した。弾丸雨飛する摩文仁山の地下でローソクの光に照らされて、軍装に威儀を正した将軍以下、野戦の宴についた。軍司令官は、ここに至るまで守備軍は粉骨を尽くしたが、沖縄の作戦とここに至り、責任をつくし得ざりしを詫びられ、幕僚以下の労苦を謝せられた。長参謀長は代表されて、偉大な軍司令官の補佐の任に耐え得ざりしを詫びて、更に来世にて相会することを約束された。

酒盃は盛られた。盃はめぐる。遂に敵を破り得なかつた。余りにも冷厳な事実である。胸に飾られた歴戦の武勲を語る略章、参謀達のつける黄金の参謀肩章は、今日を限りと輝いている。ややもすれば滅入るような空気が、戦況打開に狂奔した三カ月、苦悩のうちにやつれが見える。参謀長は皆の気持ち

をひきたてようと、努めて賑やかにされるが、ローソクの光のゆれに皆の影が揺れる。するどい目が照らされる。最後の宴は二時間位で、はるか東方を拝し、陛下の万歳を三唱し閉じられた。

狂乱の三カ月 草産す屍
かげろうと共に
妖気が大気をふるわせる
六月十八日夜
魔神ただよう 司令部壕の一角に
軍司令官 参謀長 参謀 副官等
最後の晩餐 十三名
ダ・ヴィンチの絵を夢見るような
奇すけ数も 十三名

最後の晩餐 (絵に添えた詩)
虚脱と迷夢が襲った壕
暗闇の壁 光の壁
妖魔の巣と化した鍾乳洞
人の影が動く 闇を分けて
劇は終わった



最後の晩餐 (絵に添えた詩)
虚脱と迷夢が襲った壕
暗闇の壁 光の壁
妖魔の巣と化した鍾乳洞
人の影が動く 闇を分けて
劇は終わった
狂乱の三カ月 草産す屍
かげろうと共に
妖気が大気をふるわせる
六月十八日夜
魔神ただよう 司令部壕の一角に
軍司令官 参謀長 参謀 副官等
最後の晩餐 十三名
ダ・ヴィンチの絵を夢見るような
奇すけ数も 十三名

キリストは別れを告げた
何れ 天上で再会する者達よ
何を思い 何を語ろう
思いの激流は十三名の胸中を
次々に流れ走る 怒濤のように
敵しき運命の行方を今は忘れて
外は火焰に包まれた 司令部の壕
暗陰の時は 刻をきざみ行く
パイ缶の一きれ 恩賜の珠酒
光る眼 細った顔 伸びたひげ
寛容と懺悔と悔恨が乱れ織りなす
ローソクの光が顔を照らす
輪郭だけきびしく
天皇陛下 万歳の唱和が
響いて 宴は終わった
外は火焰に包まれた 司令部の壕
最後だ、最後がやって来た。
徒手空拳、肉弾を敵戦車にぶつける
か、いやそうしなくても、地上に身を
あらかわせば、敵は我々を殺してくれる
だろう。壕の中では今生、最後の身の
周りの整理が行われ出した。皆がやつ
ている。私物を整理したり、地図を焼
く者、命令文綴を焼く者、肌身放さず
持っていた父母妻子の写真を焼く者、
長野参謀が八原参謀を補佐して起案し
た、沖繩戦当初からの軍作戦命令綴、
分厚くなった三綴を壕の中に埋めると
いうので箱に入れ、穴を掘って手伝う。
敵と戦うこと三カ月、敵の大軍を沖

繩本島に拘束し得た今、燃え上がる煙
の中に人生回想の夢を見る。そして
人々は何時までも揺れ上がる煙を恍惚
として見とれている。」
〔最後の「一戦」という章はこれを
もって終わりとする。次は「船出」
という章であるが、始めの方は省略
し、二十三日即ち軍司令官自決の場
面を転載する。〕
「二十一日昼を過ぎた。敵は我々の
壕の上に居るらしい。上土の薄い所で
は敵のやつが歩いているような足音が
聞こえてくる。また時々鉄で掘るよう
な音もする。ゴツンゴツン、ゴツンゴ
ツンと岩石を穿っているのだろう。敵
の戦車も相変わらず付近にいるよう
だ。エンジンの音が絶えず響いてくる。
夕べのとばりが訪れたのであろう。
静かになって来た。夜はしんと沈
み込んで行った。陰惨な夜だ。まだ敵
は上にいる。時々ガタンと岩をふみは
ずしたような音が深夜の静けさを破
る。この敵をやっつけねばならぬ。総
員斬込みの時はいよいよやって来た。
それは今生の別れを意味し、同時に沖
繩本島作戦の終焉を意味するだろう。
斬込みを行うべく敵偵察が行われ
た。本夜壕の上の台地を奪回して、明
朝〇三・〇〇を期し、総員斬込みを行
う予定となった。

敵の前線は我が台上を通り越えて更
に西方に移っているらしい。我々も
はや敵中に居るのだ。
夜二二・〇〇、決死の伝令によって
司令部各隣接壕間の連絡をとることが
出来た。伝令の話によれば、この台上
にはあちこちに敵がいる。歩兵砲の陣
地らしいものが構築されているという
ことだ。伝令は数回敵にぶつかってこ
の壕に飛び込むことが出来たそうだ。
二四・〇〇を期して丘の西脚にある管
理部の壕からと、西北にある通信隊の
壕からと、それに我々の壕の中隊と三
方からこの頭上の敵を攻撃、台を奪回
すべく命ぜられた。摩文仁部署にある
松井小隊方面の銃声はすっかりやんで
しまった。恐らく小隊長以下戦死して
しまったのではなからうか。
二二・〇〇過ぎ、我々の壕の戦闘員
は松原少佐を総指揮官とし、海岸側の
出口から奪回攻撃に出撃してしまっ
たので、にぎやかであった壕もあやしげ
な程静かになった。司令官、参謀長、
副官部の一部の人員と女性達だけが
残っている。鍾乳洞は全くうつろが
らんとしてしまった。司令官のおられ
る所にはローソクが三本ばかりついて
いる。その前に伏し重なり倒れている
戦死者達をこうこうと照らしている。
死臭はほのかに壕内をみたくして来た。

恐ろしいばかりに静かだ。我々は今死
線を放浪している。後は死ぬばかりだ。
死ぬのは時間の問題だけだ。考えてみ
ればそれは余りにも恐ろしい事実だ。
断崖の上に立って今その千仞の谷底に
つき落とされようとしている我々であ
る。それは夢ではない現実なのだ。し
かし私はこう深く考え込むことをやめ
た。死ぬばその時だ。私はまだ若かつ
た。それ故にか直面した死を深く考え
つめようとはしなかった。「死ぬばそ
の時だ」とふてぶてしくも決め込んで
いた。敵を目前にひかえて敵を恐れざ
る不撓の闘志が頭をもたげ出した。
伏し倒れて蒼白となり語りざる戦友
達の死に、さすがの娘達も全く力を
失っている。彼女達は屍から少し離れ
た所で相抱擁して面をふせたままだ。
本当に可哀そうだ。何という因果の娘
達だろう。
死闘した戦、一切の虚偽を離れて、
勝者の優勝感にひたっている時、敗者
は絶望の深淵に唯一人あるであらう。
二四・〇〇は来た。しかし山頂は未
だ奪回出来ぬ。司令官はいつものよう
に起きておられる。隣り合わせの参謀
長はいびきをかいて寝て居られる。総
員斬込みは〇五・〇〇に延ばされた。
時は容赦なく刻まれて行く。〇四・
〇〇になった。山頂はついに奪回出来

ないか、斬込み準備が命ぜられた。司令官、参謀長も準備を終えられた。いよいよ出撃だ。

将校たちは軍司令官の居室の前に集まり、お別れの盃を頂いた。御盃に恩賜の御酒は次々に注がれ、一人一人を巡って行った。皆々に交わされる言葉は、顔つきは、一寸そこに旅にでも出掛けるように気軽なものだ。しかし人々の眼光は射る程に鋭い。そして人生最後の言葉は衷心より出で、且つ真理を穿つ。

「お世話になりました」

「お伴をさせていただきます」

最後の言葉は交わされている。横には今朝戦死した戦友が三十名ばかり、蠟燭で作った凄惨さを物語る彫刻のように、語らざる屍として倒れている。

ただよう死臭、ともされた香の香り、ほのかに香煙がこもっている洞の中にあやしげなローソクの灯は一際明るく燃え立っている。この洞穴はもはや、うつつの世とは思われぬ。喜びや笑いは失われてしまっている。死というどん底に追い詰められて、武夫はその鉄のような武士の節操を守っていた。死を超越せんとする人々の努力の光の結晶が、今燦然と洞穴の天井の一角より照らされている。

摩文仁山は白々と明け染めかけた。



時は今だ。

海岸側の出口から斬込み隊は躍り出た。神々の出発だ。嗚呼、帰らぬ神、副官の持つローソクの灯を先頭に、淡々たる軍司令官、豪傑魁偉の参謀長と続かれる。参謀長は上着を脱いだまま。白いワイシャツの背には「義勇奉公 忠即尽命」陸軍中将長勇と血書されている。両將軍は海岸側、壕の出口付近の断崖の上に介錯役の副官、剣道五段の坂口大尉が付添い、台上に静座された。遙か東天を拝する將軍達の頭上には、かすかに紅を含んだ飛雲が流れ走る。朝霧が谷より萌え上がった。残月は未だ天空を支配するかのよう

に眺天にかかっている。

自刃だ。手元を定めた副官の振りあげた手練の白刃は、神業のように宙を切つて將軍の頭をはねた。旭日が倒れた將軍達を静かに照らし始めた。武士の掟を守り、敗れた戦に責めのあかしをたてられた。

ひと時を過ぎた。静かな壕の中で突如、拳銃、手榴弾の爆発音が闇をついた。將軍を葬った四人の副官達は軍装に身を固め、拳銃で相向かったまま、その他の人達は手榴弾や拳銃で自決し果てた。鮮血は床に流れ、脾肉はとび散る。その中には娘たちも混じっている。娘達はお互いに抱擁したままうつ伏し、最後を遂げた。

百米位の洞の間には惨烈な最後を遂げた人々、五、六十の遺体が転げ重なつて凄惨の極みである。乳石には飛び散つた肉が、鮮血がこびりついてぎざぎざしている。総ての屍、総ての物置いたままの飯盒、剣、銃、小机、屍の中に散乱した寝台、万物は総て動く力を失つた。意志を失い生の躍動を失つた。

独りとり残された、ともされたままのローソクの光が、直立して妖魔の世界を照らしつけている。光が時折ぐらりと揺れる。溶けた蠟が、ローソクをつたわつて思い出したように床に流れ宛も生あるかの如くに。

悲劇は終わった。そして総ては終わった。洞は死の世界を以て閉じられた。沖繩本島作戦は六月二十三日、悲劇を以て事実上の終息を告げた。

この外の壕の者達も逐次玉砕して行つた。沖繩に軍命を奉じ、成敗の帰趨自らと最後の結末を如何にすべきやと將軍達は念じていたのである。その深き絶望のどん底に信頼すべき上官を失い、狂乱の如くその指揮官にとりすがり右往徘徊し、怒泣の後、遂に死を選んだ人もいた。或る傷者は熱狂的に、「俺は死ぬぞ、俺は死ぬぞ」と怒号し傷つける足をひきずり、戦死者の近くに來て手榴弾の安全栓を引き、その爆裂と共に血塗れになって死んだ。偉大なる死への引具である。

我が総兵力、規兵、臨時防衛隊召兵、合計約十万人の内、六万五千人が、また戦の時まで本島に残留していた県民三十万人の内約十万人、合計十六万五千人の同胞が沖繩の山野、海中に草産す屍、水漬く屍となつた。

白骨は沖繩の山野を埋めた。敵側の発表による敵の損害は、戦傷死は約六万五千人であるという。敵側の戦死者も、我が戦死者と入り交じつて山野に倒れ伏していたのである。」

万世特攻慰霊碑

第37回慰霊祭

理事 栗原 宏

平成20年4月13日(日)、南さつま市加世田の万世特攻平和祈念館前庭に建つ「万世特攻慰霊碑」前において、第37回慰霊祭が、御遺族60数名を含む関係者約600名が参列して盛大に行われた。

当日は午前中小雨模様の天気であったが、都合よく式典の始まる頃には止んで薄曇りの空模様となった。

13時丁度、海上自衛隊鹿屋基地から対潜哨戒機P-3C1機が飛来して慰霊飛行を行った後、参列の御遺族と旧隊員の紹介があつて式典が始まった。式典は先ず、万世特攻慰霊碑奉賛会

吉峯会長の「英霊の尊い犠牲によって築かれた平和と繁栄を無にすることなく、後世に語り継ぐ」との誓いの挨拶に始まり、式次第に沿って順次整齊と進行し、参列者一同が献花した後、全員で「加藤隼戦闘隊」の歌を斉唱し、最後に、南さつま市長の挨拶があつて無事終了した。

午前中、万世特攻祈念館を見学して知り得たことを記すと、この地にあつた万世飛行場は、今はその跡形も見られないが、昭和18年夏から沖縄作戦の前線基地として、極秘に建設が進められ、1年後の昭和19年末に完成した急造の飛行場であつた。周辺住民も勤勞奉仕隊として、松などの樹木を切つたり、周辺の丘陵からトロッコで山砂利を運んだりして、官民一体となつて建設した。このため、滑走路は、砂地の

第54回 知覧特攻基地戦没者慰霊祭

理事 杉山 蕃

平成20年5月3日、知覧特攻慰霊顕彰会主催による第54回知覧特攻基地戦没者慰霊祭が、厳肅、盛大に執行されました。

今年も南国特有の、むせ返るような

露地に東西800メートル、南北400メートルで、舗装のない露地のままであつたため、機体が軽くタイヤの太い固定脚の特攻機が集められたという。



万世特攻平和祈念館

使用期間は、沖縄戦の始まった4月から終戦までわずか4カ月、陸軍最後の特攻基地で、201名の戦死者を出している。



万世特攻慰霊碑前慰霊祭

陽気の下、快晴に恵まれて、全国各地から1200名を超える参会者を得て営まれた慰霊祭は、主催者のご苦勞、各戦友会の方々のご健在ぶり等、この地から飛び立った御英霊の方々への立派な手向けになったものと思います。

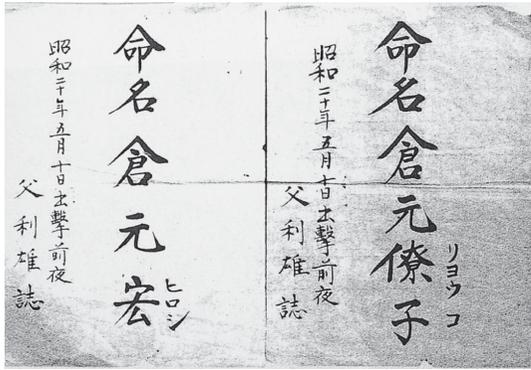
今年の御遺族代表は、鹿児島出身の第六十振武隊倉元俊雄大尉の御息女が務められました。厳父出撃後にご出生の御息女は、62年の半生を、「国のた

めに散った父」という誇りと、大変なご苦勞の中で見事に成長された独特の気品と雰囲気を感じさせる方で、その立ち居振る舞いは、参列者一同に深い感銘を与えました。

今年の知覧は、大きく変わった事がありました。それは、昨年末の市制移行に伴い、旧知覧町は、川辺町、穎娃町と合併して南九州市という壮大な市になったということでした。従来、川

辺郡知覧町であつた所在は、南九州市知覧町となり、諸施設等は、頭に南九州市が付くことになりましたが、幸いに「知覧」の町名は存続し、特攻関係の施設、協会は、そのままの名称が維持されることでした。ご承知のよ

うに、知覧は全国有数の美しく整備された町並みですが、時代の流れに沿つた市制移行後も、益々南薩摩の中核として繁榮されることを希望するもので



倉元少尉が出撃前夜、生まれてくる愛児に残した命名書 (提供/靖國神社 遊就館)

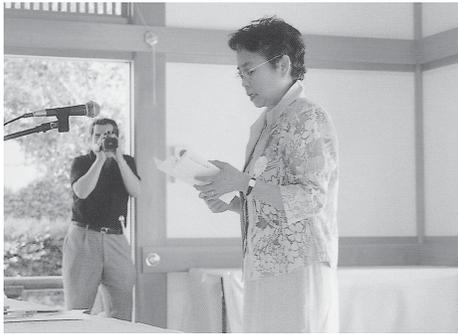


倉元利雄少尉

「価値を感じるといった内容の碑文が刻まれています。今年も、知覧への旅は、思い出深いものとなりました。」

す。
本年は、慰霊祭に先立ち、霧島神宮まで足を伸ばして、参詣して参りました。47年前、この地上空を主要訓練空域として汗を流した思い出があり、久しぶりに訪れた感慨は一人のものがありました。境内に徳富蘇峰の記念碑があり「天皇を中心とする国体の正しさを主張し続け、その成果に我が人生の

価値を感じるといった内容の碑文が刻まれています。今年も、知覧への旅は、思い出深いものとなりました。」



慰霊のことは 遺族代表(故倉元利雄大尉の長女)田井僚子さん



御供と献花で飾られた観音様



た。蘇峰は、94歳の長寿を全うした人でしたが、それに比べて「人生の価値」を、極めて厳しい状況下、凝縮された期間に解を求め、南溟の海に散った英霊へ思いをめぐらせるとき、慰霊の念を益々深く致しました。霧島は「まほろば」の里、地元高校の登山遠足の集団と複数回出会いました。日本人が、誇りとして伝えるべき神話、神々の物語を一切教えない時代になって60余年、地元とは言え、若い世代に、天地創造に始まる雄渾な神話の世界を知ってもらうことは大事なことであり、立派な九州男児に育ってほしいと心から声援を送りました。

今年も、知覧への旅は、思い出深いものとなりました。

〔編注〕
今年の第54回知覧特攻基地戦没者慰霊祭で、遺族代表として「慰霊のことは」を捧げられた田井僚子さん(旧姓倉元)は、第六十振武隊倉元利雄少尉のご息女であるが、倉元少尉は、鹿児島出身、大正3年生まれで、鹿児島高等商業学校卒業後、昭和18年10月陸軍特別操縦見習士官第一期生となり、翌19年10月陸軍少尉に任官、三重県亀山飛行場で訓練中の昭和20年2月15日に熱田神宮で結婚式を挙げた。しかし、空襲のため、式だけ挙げると妻の喜美子さんと母親はその日のうちに郷里に帰った。倉元少尉は、同年3月29日、明野教導飛行師団で編成された特別攻撃隊「第六十振武隊」に所属し、沖縄

特攻作戦に出撃するため、同年4月都城東飛行場に進出した。倉元少尉が第六十振武隊隊員として四式戦「疾風」に搭乗し、僚機6機と共に都城東飛行場を最初に発進したのは、同年5月4日、第六次航空総攻撃に際してであったが、離陸直後、倉元機の油漏れを発生した僚機がトラブルを知らせようとして接触し、墜落した。倉元機は同飛行場に引き返し、胴体着陸をして生還した。その1週間後の5月11日、第七次航空総攻撃に際し、倉元少尉は隊長として第六十振武隊の3機を率い、第六十一振武隊の3機と共に出撃、沖縄周辺洋上の敵艦船群に突入、散華され

た。30歳であった。

倉元少尉が妻の喜美子さんと新婚生活を過ごしたのは、第六十振武隊が宿舎としていた料亭の隣の旅館で、同年4月13日から出撃までの1カ月足らずの短い期間であった。翌年1月27日、喜美子さんは女の子を出産したが、最後まで特攻隊員であることを妻に知ら

せなかった倉元少尉は、妻と生まれてくる愛児のために、遺書と前頁に掲載のような命名書を書き残した。そこには、妻への感謝の気持ちと、未だ見ぬ我が子への愛が認められていた。「喜美子 出発の時は許して呉れ、御許を愛すればこそ一時をも悲しみをさせたくない心にて一杯だった 決して

嘘を言うのではなかった どうか元氣を出して全ゆる苦しみ、悲しみと闘って行って呉れ 強い心で生きて行って呉れる事を切に切に望む
では只今より出発する 有難う有難う俺は幸福だった 喜んで征く
御許の幸福と健康を祈る
五月四日 五時十二分

「愛児よ 若し御許が男子であったなら、御父様に負けない 立派な日本人になれ 若し御許が女子であったなら、気だてのやさしい女性になって呉れ そして御母様を大切に充分孝養をつくしてお呉れ 父より 愛児へ」

平成20年

鹿児島（鹿屋、枕崎）方面 特攻慰霊の旅

理事 藤田 幸生

今年もまた、鹿屋市小塚公園慰霊塔前広場における「旧鹿屋航空基地特攻隊戦没者追悼式」（4月5日）と枕崎平和祈念展望台における「海上特攻第二艦隊戦没者追悼式」（4月7日）とに協会を代表して参列してきた。

鹿屋の追悼式は、5日土曜日の午前中、曇り空の下、満開の桜吹雪の中で、例年通り執り行われた。各御遺族のお名前を読み上げての御参拝、戦友による「同期の桜」の斉唱、編隊飛行等々。特に、戦友の皆さん達は、年々御高齢となり、「同期の桜」の碑前献歌は、味わい深いものとなってきている。P3C、SH60Jの編隊飛行は、見事で

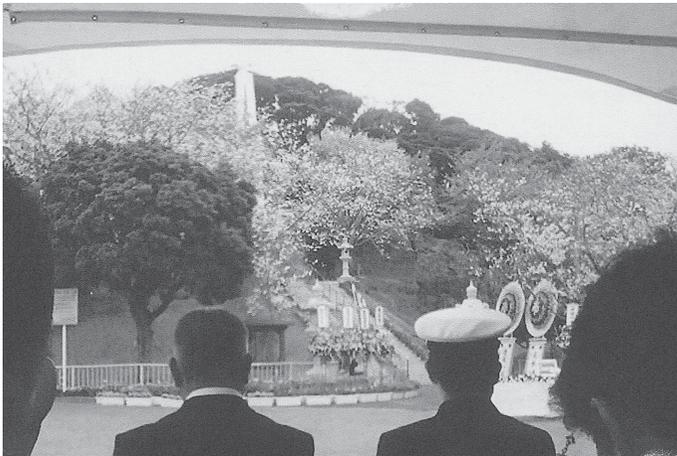
あった。今後とも新しい機種で受け継がれていくことであろう。

枕崎の追悼式は、4

月7日（月）に執り行われた。新しく岩田様による碑と御遺族による一対の灯籠が建立されていた。今年、特に印象深かったことは、好天に恵まれ、遥かに台上から望む海が、明るく眩しかったことである。陸自、

海自の合同支援を得た素晴らしい追悼式となった。同日、同時に執り行われていた、徳之島の犬多布岬における慰霊祭を想いながら参拝した。

中1日あったので、



満開の桜の丘に仰ぎ見る慰霊塔前での追悼式



遙かに戦艦大和の沈没地点を望む枕崎市平和祈念展望台

からも、この時期に毎春、鹿児島を訪れたいと思った。

義烈空挺隊碑前祭

評議員 田中 賢一

この行事は、毎年6月初旬、空挺同志会沖繩支部の主催で行われている。沖繩支部の構成員は、習志野の自衛隊空挺団から沖繩の自衛隊に転属となった現職自衛官が主体で、支部長の桃原さんも、嘗ては自衛隊に在籍していたが、今は民間人、旧軍の関係者は一名もない。そのようなことで、日取りは自衛隊の行事と関係があるので、毎年一定していない。今年、習志野の自衛隊空挺団からは、団長以下11名が参加してくれた。

さて、私は、義烈空挺隊長の奥山君とは、彼が陸士の1期後輩ではあるが、昵懇の仲だったので、以前は毎年慰霊祭に出向いていたが、ここに至って歩行が覚束ないので、御免被り、微衷を一文に託して碑前に供えてもらうことにしたが、式典の中で読み上げてくれたという。

「義烈空挺隊追想の辞」

田中 賢一

鳥兎匆匆 兄等が国に殉ぜしより
六十余年を経ぬ 悲願空しく国破れ
涙せしは 遠き昔の事となりぬ

現下国民は平和の美酒に酔い 嘗て祖国の為一命を擲ちし特攻烈士のことを知らず 私利私欲を専らにし享楽に耽り 国を思う心絶えてなし 兄等と志を共にせし空挺の老兵も残り少なく 本日の祭に参じ得る者なし 今や吾人の為しうるは 特攻の史実と烈士の精神を語り伝うることあるのみ

語りてもなお語りても尽きざるは 国に殉ぜしますらをの友 続く者ありと思へばひたすらに もののふの道駈けしをのこら

本日この祭典を挙行せられしは 空挺同志会沖繩支部にして 参列者は同会員と習志野から馳せ参ぜし現職空挺隊員なり 特攻烈士の精神を継承するは 自衛隊員以外他なし 義烈のみ魂よ 戀せ給え

ここに祀る奥山隊は私にとつて身近かな存在だったが、空輸に任じた第三独立飛行隊とは全く御縁がなかった。追悼することに疎かであつてはならない。その意味をもって諏訪部忠一隊長の辞世の一詩を掲げる。

家訓 諏訪部忠一

尊也日東国 享生感激極
青雲入武窓 鍛練抜山力
嚴父嚴勸辭 祖來家訓垂
死為忠義鬼 無後護皇基

新妻幸雄中尉の遺詠

待つありてながむる月のすずしさよ (以下空挺団広報班長の言に拠る)

碑前祭は6月7日11時から神式で行われた。参加者は30余名、同志会本部と他の支部から3名、空挺団から団長以下11名で、主体は沖繩支部の会員だった。

祭主である沖繩支部長の捧げた祭文を見せてもらったが、義烈空挺隊の史実をよく承知しており、その精神を受け継ぐのは自衛隊である、と述べており、力強く嬉しく思った。

また、義烈には沖繩出身の山城准尉がおり、支部員浜田種夫さんの尽力によつて遺族である妹さんの所在が判明

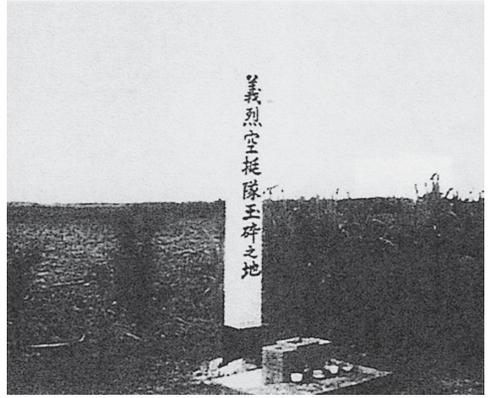


したので、来年は案内するという。

前日、嘗ての古戦場読谷飛行場跡に、今回の参加者全員打ち揃つて行った。(以下田中注) ここには、摩文仁の碑より以前に、不時着による生き残りの和田君が建てた「義烈空挺隊玉碎之地」と書いた木製の碑が建っている。沖繩が日本に返還されて直ぐ建てたので、50年以上経っている。初めに建てた和田君等は、皆故人になってしまったが、沖繩支部が3回ばかり更新した。飛行場跡は国から読谷村に移管されたので、村ではここに中学校を建てる計画で、この碑は飛行場跡の別の所に立て替えねばならない由である。

この碑前祭に、特攻協会では、毎回



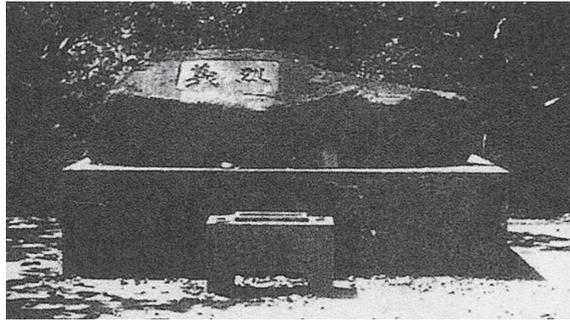


理事が参列していたが、今回は都合により供花のみにとどめた。
 昭和20年5月24日夜半、義烈空挺隊は、沖縄読谷飛行場に突入、翌日は敵飛行場の機能を完全に喪失させ、航空特攻に寄与した。

読谷飛行場跡に立ちて

この辺境に 散りしをのこら
 狂乱を 既倒に廻らさんの心
 燃えさかる 鼻敵の とりで
 路傍の小石よ 汝は 見しか
 かつての叫喚 阿修羅の怒号
 語り聞かせよ いくさ神の姿

泰平の美酒に酔う うつし世
 知る人ぞ知る 丹きまごころ
 あとに続けと 残せしことば
 今ここに つどいしともがら
 世につげむ 失いしやまと心
 取り戻さずんば お国危しと



この碑は、各県の慰霊碑が林立して
 いる摩文仁台上・摩文仁慰霊公園内の
 一番高いところにあり、副碑には、作
 戦の概要と隊員113名の氏名が刻ん
 である。
 (昭和51年5月24日建立。「義烈」の文

字は、奥山隊長の遺筆を拡大して刻んだものである。

「義烈」碑の前で

魂魄寄り添う摩文仁の丘
 鎮まるか義烈の士
 思い出す百余のをのこ
 奥山隊長の指さす所
 など遅れをとるべきや

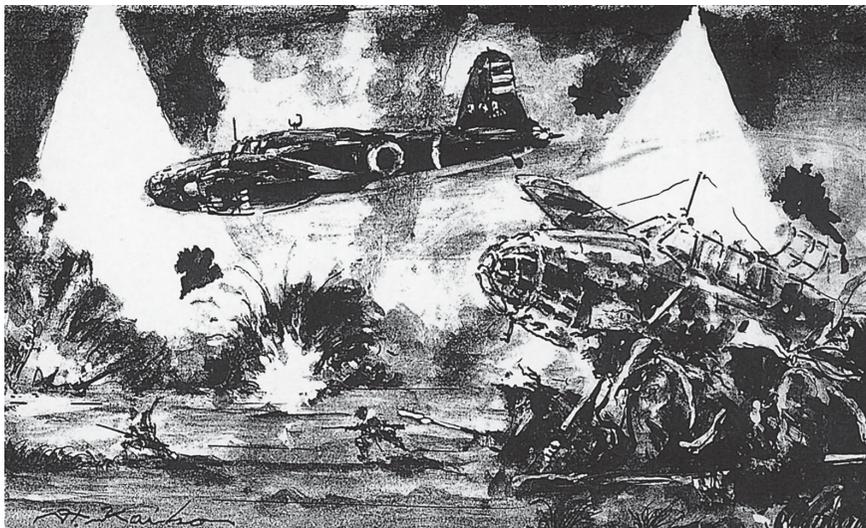
戦勢日に非なれど
 乃公いでづんばの意気
 挺身殉国の耿き心
 我が後に続く者あらむ
 散るべきときぞ美しく

梓弓 引きかへさざる
 ますらをのこころ
 今日このために
 鍛えしわざ 錬りしきも
 笑顔で発ちし健軍の基地

風吹けど雨降れど
 厳として立つ義烈の碑
 訪う人に 語る石ぶみ
 人しるや いなや
 我が国にかかる人ありしを

義烈死闘 幻の図

海法秀一画く



碑は語る特攻隊⑦

田中 賢一



宮崎県高鍋町持田の高鍋大師境内にこの碑がある。毎年11月23日に川南護国神社の例祭があり、私は習志野の自衛隊空挺団から参加する者を、この碑の所に案内し、由来を説明している。私が行ける間は、この碑は語り伝えられるであろうが、やがては人々から忘れ去られてしまうだろう。高鍋大師は人里離れたところで、訪れる者も殆ど無く、しかも境内の一隅で目立たない所にある。

挺進第四聯隊に榊原達哉という将校がいた。陸士55期で、私が昭和19年7月から陸軍挺進練習部の下士官候補生隊の隊長をしていた時、聯隊から区隊長要員として、私の指揮下にあった。気性の激しい男で、教育は極めて熱心であり、人望は厚かった。後から思えば彼には心に消え難いわだかまりがあった。それより一年前、彼が計画実施した演習で、小丸川を渡渉する場面があり、八名の殉職者を出してしまつた。その頃私は千葉の戦車学校の学生で、挺進練習部になかつたので、話を聞いた程度の認識だつた。

榊原は、小丸川の堤防上に、自費をもつて八勇士の碑を建てた。彼の同期生も資金援助をしたが、人々は榊原の建てた碑と呼んでいた。それが戦後堤防改修のため現在の場所に移された。建てたのが戦争中で、石材も吟味できなかったと思う。風化して字も読めなくなつたので、私は由来を刻んだ金属板を作り、裏面の土台にはめた。この金属板は、日本大学生産工学部の大谷利勝教授(当時)が特殊な技法で造つてくれたものである。

榊原の最後は、私の作つた碑文に述べている通りだが、少し敷衍すれば、レイテ空挺作戦は、初めはブラウエン地区の三つの飛行場だけが、目標だったが、敵航空を押え込むには、タクロバンにも降下すべきであると、第四聯

隊の中隊長連中から提案された。これはいつ行くかいつ散るのかは知らね

忠烈 八勇士殉職之地

- 陸軍大尉 伊藤 成一
- 陸軍中尉 鈴木 寛
- 陸軍准尉 河原田津留吉
- 陸軍曹長 平方國三郎
- 陸軍兵長 池本 治登
- 陸軍上等兵 杉村 博
- 陸軍上等兵 山崎 茂男
- 陸軍上等兵 大森 良市

昭和十八年六月十八日挺進第四聯隊では新に所属となつた将校の実兵指揮の訓練を実施し、その中に小丸川を渡渉する場面があつた。前日山間部に降つた雨で河川が増水しており、押流されて八名が殉職した。

この演習を計画した榊原達哉中尉(当時)は責任を負つて自決しようとしたが、聯隊長に諭され思い止まつた。翌十九年聯隊がレイテに降下するとき、榊原大尉は地上部隊と提携できる見込みの全く無いタクロバン降下部隊指揮官を志願し、八名の位牌を抱いて飛行機に乗り込んだがその後の状況は詳かでない。殉職八柱の魂魄もレイテ作戦に参加したのである。碑の裏面に刻まれている歌

何日行くか何日散るのかは知らねども
今日のつとめに吾ははげまん

この碑は初め小丸川の堤防上に建てられたが、堤防改修工事の為昭和四十年に現在地に移された。

「ども」の歌は、挺進練習部の独身寮に掲げてあつた。入居者の多くは第三、第四聯隊の将校だつた。その中に榊原がいたかどうか、私の記憶では定かでない。この居住者の殆ど、あるいは全部かもしれないが、第二挺進団、挺進工兵隊、挺進通信隊の動員で比島に渡り戦死してしまつた。



榊原は、部下を連れて延岡の女学校を訪ね、一緒に歌を歌つたりした。当時の女学生達が、戦後になって、榊原はどのようにして戦死したか、私に尋ねるので、資料を提供した。この絵はその人達の描いたもので、八柱の位牌を抱いた榊原の姿である。

陸軍挺進部隊銘々伝

田中 賢一

浜松陸軍飛行学校に練習部が設けられ、初めて落下傘降下を行ったのが、昭和16年1月、終戦まで僅か4年半余の短い歲月だったが、顧みれば、波乱万丈の歴史だった。それを織り成す人々、忘れ難い容貌。ここに、次の標題のもと、最も印象深い人の略伝を書き残して置くことにする。

陸軍挺進部隊を創った人

- 挺進団長 久米精一大佐
- 挺進練習部長 川島慶吾中佐
- 挺進団司令部員 木下秀明中佐
- 挺進戦車隊長 面高俊秀少佐
- 飛行戦隊中隊長 新海希典大尉
- 挺進練習部付 出川正吉技師
- 職名と階級は、本記事時代のもの
- 陸軍挺進部隊に殉じた人
 - 挺進第三聯隊長 白井恒春少佐
 - 挺進団司令部員 稲本 宏少佐
 - 義烈空挺隊長 奥山道郎大尉
 - 飛行戦隊中隊長 三浦 浩大尉
 - 挺進第四聯隊付 榊原達哉中尉

○初代挺進団長久米精一大佐

昭和16年11月、第一挺進団司令部、挺進第一聯隊及び挺進飛行戦隊の動員



が下令された時、挺進団長として飛行第十六戦隊長から着任された。私はその時司令部の部員に任じられたので、この人にお仕えることになった。

陸士31期、出身は砲兵で、早く航空に転科したが、操縦者ではない。軽爆の戦隊長の経歴がある。

この人の性格を一言で表せば、「謙虚」という言葉が当てはまる。パレンバン作戦に際し、団長は、第十六軍井戸田參謀等と共に輸送機で強行着陸した。着陸場所は操縦者野崎中尉に任せてあった。野崎は、飛行場から少し離れていたが、草原と思う所に、搭乗機口式輸送機を着陸させた。草原と思つた所は一連の湿地で、飛行場に行く道もなく、湿地が続き、その日のうちに飛行場には到着出来なかつた。初めから地上戦闘を指揮する考えはなく、飛行場攻撃は聯隊長に、精油場攻撃は中隊長に任せてあったので、作戦全般には支障なかつた。

ところが、パレンバン作戦の大戦果は、久米部隊の名で報道された。新聞記事も聯隊長甲村少佐の名は文中にはあるが、人々は久米部隊として認識したのは当然だった。「儂は功を奪いに行く気は毛頭なかつたのに」と作戦後しんみりした口調でしばしば述べている。「聯隊にそのようなことを口にする者は一人もありません」と私はその都度申し上げた。

初め高級部員木下中佐の立てた計画では、地上戦闘は聯隊長に任せるにしても、上に対する報告や進出してくる飛行部隊との接渉は、団司令部が担当すべきである。従つて木下中佐と田中中尉(私)は下士官2名を伴い、聯隊と共に降下する。その下士官も人選してあった。

それまで、木下中佐の起案したこと、そのまま決裁していた久米団長が「陸軍最初の空挺作戦に儂は基地に留まることはできぬ。上田大尉と齋藤通訳は同行せよ、他の者は基地に残れ」と、厳然と言いつ放つた。上田大尉(50期)は通信係将校だった。

ここで、一つ別の人物を紹介する。副官稲垣芳治大尉(少候17期)は「団長が戦死して副官が生きていたのでは申し訳がない」と、同行を懇願したが聞き入れられなかつた。その前に団長

は私に「聯隊のために、速射砲を1門持つて行ってやりたいので、強行着陸機に積んどいてくれ」と言われたので、私は聯隊の兵を使って1門積んだ。その時、稲垣副官は雨外被を被り速射砲の陰に隠れたが、私は以心伝心で黙っていた。このようにして、稲垣副官はパレンバンに行つてしまった。作戦が済んでから、このことについて久米団長は私に言った。「稲垣は儂の考えが解らなかつた」と。戦闘で戦死者が出た時の事務処理は副官の役目である。それを迅速にやるには基地に残つていなければならぬ、ということだったらしい。

この人は、自分の解らぬことには口出ししないで、部下の言う通り実行した。作戦が終わり、内地に帰つてからのことだが、一聯隊が野外で聯隊の演習をやるので、請われて視察に行き、私が随行した。終わつて所見を言わねばならぬので起案せよ、と命じられ、私は書いて出した。それをそのまま読むのだが、円匙と書いたのを、まるさじと読まれたのには驚いた。忘れ難い思い出である。

昭和19年8月少将に進級し、同月転出。終戦時は第二〇九師団長。

○挺進団司令部高級部員 木下秀明中佐

初めに、第一回出動時の団司令部の編成を紹介する。

団長 大佐 久米精一 士31期
高級部員 中佐 木下秀明 士35期
部員 大尉 弘中郁夫 士47期
副官 中尉 田中賢一 士52期
副官 大尉 稲垣芳治 少17期
副官 少尉 山口直二 特志
通信係 大尉 上田大三郎 士50期
暗号係 少尉 小瀬恭介 特志
主計 大尉 谷口芳太郎
軍医 中尉 深田秀雄
木下中佐は、フランス駐在武官補佐官や陸軍省軍事課勤務等の経歴があり、頭脳明晰、能力抜群、実行力に富み、東洋風豪傑の一面があった。しかし、補佐道は充分弁え、常に団長を立てて事を処理した。弘中大尉は、航空の操縦者で、航空関係の業務に携わった。私の主担任は補給、輸送等となっていたが、高級部員の走り使いが多かった。



料の計算等具体的な事項を命ぜられたが、聯隊や飛行戦隊との調整を要し、私にとっては、容易ではなかった。

木下中佐は、団長の訓示まで起案したが、たちどころに書き上げ、なかなかの美文だった。この時の訓示は残っていないが、後のラシオ作戦時のが手元にあるので、後で紹介する。

昭和17年2月14日、木下中佐と私はカハン飛行場で、パレンバンに向かう大編隊を見送った。中佐は、フランス駐在でオランダ兵の素質も承知していたのだろう。自信ありげだった。

翌日、現地からの第一報は、ジャングルで物料が入手できぬということだった。当時は、携帯兵器はすべて物料箱に入れて、重爆で投下していた。そこで、飛行場大隊の兵器を集めて空輸する手配をしていたところ、今度は兵器は必要ない、控置してある第三中隊を送ってよこせと言ってきた。飛行戦隊も第三中隊もスラングーパターニーに

いるので、すぐに呼び寄せてパレンバンに向かわせた。飛行場は既に確保しているの、着陸輸送でもよいわけだが、中佐は降下を命じた。このことは、第三中隊の士気を考えてのこと、中佐の処置は正しかったと思う。

パレンバン作戦は、大成功に終わった。ここで腹の虫が納まらないのは、明光丸の海没により功を弟聯隊に奪われた第一聯隊である。使ってやらねば士気に関わると心配したのは、団司令部だけではない。南方軍司令部でも心配し、参謀部が次の目標を挙げて挺進団に意見を求めてきた。アングマン、バンカランプラランタン、サバン等があった。これに対する中佐の答えは痛烈だった。

まずアングマンについて、ベンガル湾に浮かぶこの島は、英海軍の潜水艦基地になっていた。中佐は言う「主作戦と関係ない。こんな目標に使うことを総司令部が決裁する筈がない」

次のバンカランプラランタンは、北部スマトラにある油田である。中佐は笑って相手にしない——いつまでも、どじょうが柳の下にいてくれるかな——パレンバンに懲りた敵は、この油田を徹底的に破壊したという情報は間もなく入った。

三つ目のサバンは、スマトラ西北部

にある港で要塞もあるという。我が軍がスマトラ内を進攻すると、敵はここからインド洋に脱出する。——愚案なり。大陸戦場ではあるまいし、退路遮断は洋上でやればよい。こんな頭でよく総司令部の参謀が勤まるものだ——我々の前でこのように解説してくれたが、南方軍の参謀にも、これに近い言葉で答えたようだった。中佐は度々西貢まで出向いていた。

3月中旬、我々は新戦場ビルマに移り、第五飛行師団の指揮下でラシオ空挺作戦を行うことになった。4月29日に作戦は発起されたが、天候不良で、目標手前30分のところまで行ったが、引き返し、作戦取り止めとなった。挺進団の作戦構想は、今回も木下中佐の頭脳から出たものだが、後で概要を述べることにし、先に団長訓示起草案のこゝとを述べる。トングーの宿舎に入ってから、中佐は私に、罫紙に鉛筆書きで、踊るような文字で書かれた団長訓示を渡し、決裁をもらってこいと言われた。

訓示

挺進団使命達成ノ好機ハ遂ニ来リヌ
而モ天長ノ佳節ニ方リ意義極メテ深
キ本作戦ニ挺進ヲ決行ス 栄光何カ
比セン 真ニ感激ノ極ミニナリ

諸子既ニ示セシ所ニ抛リ飽クマデ挺進兵ノ本領ニ徹シ 果敢積極進ンデ戦機ヲ構成捕捉シツツ全力ヲ奮ツテ任務ヲ完遂セヨ

御稜威ノ下必勝ナリ

敵ノ意表ヲ衝ク機動 必中ノ火力及伝統ノ白兵威力ヲ随時随所ニ發揮シテ見敵必滅 以テ相俱ニ勝利ノ大道ヲ驀進セシ
右訓示ス

昭和十七年四月二十九日

第一挺進団長 久米精一

この作戦計画では、第一次挺進で第一聯隊主力をもってラシオ兵營に降下する。引き返して来た輸送機をもって第二次挺進を行い、第一聯隊の一個中隊と第二聯隊の二個中隊を団長直轄とし、飛行場に降下するという構想だった。中佐は第一聯隊に同行、第二次挺進目標の敵飛行場は、兵營から16キロ離れているので、敵が待ち構えていては、奇襲は覚束ない。そこで、輸送機

編隊に先行し、重爆3機に搭乗した先遣隊を超低空で侵入、強行着陸させる。その指揮官はお前やれ、と言われ、私の役目となった。団長は副官を伴い、降下直後着陸する。すべて木下中佐の頭脳から出た構想である。実現すれば、第五十六師団に追われて敗退する重慶軍を捕捉殲滅出来た筈だったが、天候に恵まれず、うたかたの如く消えてしまった。

南方進攻作戦が一段落し、挺進団は内地に帰ることになった。司令部と飛行戦隊は空路、兩聯隊は船で、17年6月には全部宮崎島の古巣に納まった。

間もなく挺進団司令部は、陸軍挺進練習部に復帰し、団長は練習部長になり、木下中佐は高級部付と呼ばれ、私はその下で教育訓練担当の幕僚となった。兩聯隊、特に第一聯隊は、落下傘部隊創設当初志願して集まった者で編成しているの、気の荒い下士官が多い。それに南方では遂に作戦に参加できない。

御遺族と、来賓と乙種飛行豫科練習生1期から24期まで、約三百名が参集殿に集い、正午から約50分間、慰霊祭が行われました。

当日は、「花は散りその色となく眺むれば、むなしき空に春雨ぞふる」との式子内親王（新古今集）の歌を思い

かかった。内地に帰り、元気のはけ口を酒に求めて事故を起こす、高鍋補充馬廠の召集兵と喧嘩をして、止めに入った憲兵を殴ったとか、その類の事故だけが何しろ件数が多い。航空総監部にまで書類が上がっていたらしく、練習部長宛に軍紀風紀振作のため如何にしているか、報告を求めてきた。

丁度その時、久米大佐はバレンバン作戦の戦功により、天皇陛下に拝謁を仰せつかるということになった。中佐は練習部長に対し「拝謁というお目出度い折に航空総監部で例のことで叱られてはつまりません。軍紀風紀振作については、追って木下中佐に報告させます、と仰ってください」と申し上げた。久米大佐拝謁の件は事なく済んだが、中佐は一向に報告に上京する気配がない。私が心配して尋ねると「叱られに行くのに慌てることはない」と腰を上げない。

暫く経ってある朝、今日航空総監部

に行くから軍債を出させろ、と言われた。練習部には九九式軍債が2機あって、飛行戦隊に委託してあった。中佐は上京し、帰ってきてから久米部長に一言、叱られてきました、と報告しただけだった。私がどんなでしたか、と尋ねると「河虎（航空総監部総務部長河辺虎之輔）はカンカンになって怒ったよ、俺は頭を下げていたから小言は全部頭の上を通り越していった」と。戦争中私の接した木下秀明は、以上の通りだった。

昭和18年3月、第十五軍参謀に補せられ、インパール作戦失敗後、関東軍機動旅団長になり、終戦時停戦命令が伝わらなかつたため、戦闘行動を続けたとて、昭和30年までソ連に抑留された。帰国後、何回かお目に掛かり、往時を語り懐かしい思いをした。

出しました。しかし、躑躅が咲き慰霊祭に相応しい天気になりました。慰霊祭は、国歌奉奏、修祓、祝詞奏上、祭文奏上（住友会長）、献歌（総員で「同期の桜」を斉唱）、二班に分かれて本殿に昇殿参拝し、玉串奉奠、黙祷（奉奏「国の鎮め」、撤饌、直会、

退下で、祭典は終了しました。住友会長は、祭文奏上で、心に残ることを述べられました。

「支那事変から大東亜戦争まで、豫科練出身者は、海軍航空の中核となり、北はアリューシャンから南はインド洋まで、全ての航空戦を戦い、赫々たる

平成20年度

豫科練雄飛会慰霊祭

小倉 利之

平成20年4月10日（木）、豫科練雄飛会（住友勝一会長）慰霊祭が、靖國神社で行われました。

当日は、「花は散りその色となく眺むれば、むなしき空に春雨ぞふる」との式子内親王（新古今集）の歌を思い

かかった。内地に帰り、元気のはけ口を酒に求めて事故を起こす、高鍋補充馬廠の召集兵と喧嘩をして、止めに入った憲兵を殴ったとか、その類の事故だけが何しろ件数が多い。航空総監部にまで書類が上がっていたらしく、練習部長宛に軍紀風紀振作のため如何にしているか、報告を求めてきた。

に行くから軍債を出させろ、と言われた。練習部には九九式軍債が2機あって、飛行戦隊に委託してあった。中佐は上京し、帰ってきてから久米部長に一言、叱られてきました、と報告しただけだった。私がどんなでしたか、と尋ねると「河虎（航空総監部総務部長河辺虎之輔）はカンカンになって怒ったよ、俺は頭を下げていたから小言は全部頭の上を通り越していった」と。戦争中私の接した木下秀明は、以上の通りだった。

武勳を立てました。このことを生存者は、後世に伝えねばなりません。無限の未来を秘めた若き命を、祖国を救うために、何のためらいもなく、捨てて顧みない崇高な犠牲的精神は、特別攻撃隊員の真心に、その極致を見出すことができます。……

日本人に誇りや自信を持たせないよう、社会への貢献や義務を教えず、自由主義や個人主義を教え、日本国民は皆、利己的で、公共心のない国民になりました。民主主義国家は、有権者の

朝鮮出身特攻隊員の碑

日本女性が故郷に建立

会員 宮地 正美

朝鮮半島出身の特別攻撃隊員の慰霊碑が、戦後60余年経って初めて故郷の韓国慶尚南道泗川市に、一日本人女性の力によって建立された。

その特攻隊員の名は、卓庚鉉（チョクケイジン）（日本名・光山文博）陸軍少尉である。卓氏は大正9年朝鮮半島南端の慶尚南道泗川郡に生まれ、京都薬学専門学校を卒業、昭和18年10月陸軍特別操縦見習士官（第1期生）となり、大刀洗陸軍飛行学校知覧分校所に入校、翌19年10

多数意見で国家の方針が変わります。危険、きつい、汚いことは、他人に任せたいと願うのが、大衆であります。国家百年の大計のため、憲法は、一日も早く改正しなければなりません。国家存続のために、国防は、尊い生命を犠牲にする崇高な行為であります。後世の者が、戦没者に感謝し、顕彰し、追悼し、慰霊しなければなりません。そして、それがなければ、国難が襲った時、誰が自分の生命を、犠牲にするでしょうか。……」

月卒業して陸軍少尉に任官、翌20年3月明野陸軍教導飛行師団で編成された第五十一振武隊に所属、防府飛行場から知覧飛行場に前進し、5月11日の第7次航空総攻撃に際し、隊員7名の一人として午前6時33分、僚機と共に一式戦闘機「隼」に搭乗して知覧より出撃、沖繩飛行場西海面の敵艦船群に突入、散華された。24歳であった。

卓氏は、映画「ホタル」（平成13年東映）「俺は、君のためにこそ死ににいく」（平成19年東映）や「ホタル帰る」（草思社）などで取り上げられているが、特攻の母・鳥濱トメさんによると、彼は朝鮮半島出身で日頃面会人もなく、不憫に思っていたところ、出撃前夜にトメさん宅を訪れ、「アリラン」

を歌って翌朝、出撃していったという。黒田福美さん―戦後生まれの韓国通の女優さんであるが、今から17年前、平成3年の夏、彼女の夢に、一人の長身の青年兵が現れ、「戦争で死んだことに後悔はないが、自分は朝鮮人であるのに日本人の名前で死んだことが残念だ」と告げたという。縁もゆかりもない全くの他人が夢に現れ、無念さを告げる―一体、この青年は誰だろう、と気になり、爾來雲を掴むような人探しが始まった。靖國神社の協力や遺族らとの面会など10年に及ぶ懸命な調査の結果、「その青年は、光山文博こと卓庚鉉氏だ」と確信するに至ったという。そして、さまよえる彼の魂を慰めるため、朝鮮の故郷に、光山文博では

慰霊祭の後、場所をグラランドパレスホテルに移動し、「雄飛会発会五十周年記念大会」が実施されました。記念大会では、式典と宴会が行われましたが、その内容は、雄飛会事務局の素晴らしい企画・実行により、皆さんに喜んでいただける内容でありました。

記念式典で、雄飛会の足跡の一部の紹介がありました。戦後昭和33年、約百名の会員で雄飛会が発足し、昭和38年、会員が約八百名となって機関紙

を發行し、昭和41年、「豫科練二人像」の碑を、土浦海軍航空隊跡地に建立した、とのこと。宴会の内容は、楽団演奏、居合い術演武、伝統芸能、懐かしの青春メロデー、軍歌演習等で、参加者は、先輩や同僚と一緒に昔を懐かしみ、50年の歩みを回顧することのできた記念大会でありました。

雄飛会の皆様の御健康と慰霊顕彰行事の永続を心より祈念いたします。なく、本名の「卓庚鉉」の名を刻んだ慰霊碑を建立しようと決心したのである。日韓関係の難しい中、歴史問題の核心の核心、あたかも火中の栗を、しかも真っ赤に燃える栗を拾うが如く、卓庚鉉特攻隊員のため、日韓友好のため、彼女は単身、静かに、しかし決然と動き出したのである。若き一日本人性が全霊で取り組み、幾多の困難、難関があったであろう、しかし、身を挺しての熱意、熱誠が人を動かし、彼国にも協力者が現れた。

ソウル明知大学の洪鍾泌教授（現在東京大学大学院客員教授）―沖繩「平和の礎」の韓国人戦没者の調査を長年続けてきた。洪教授の兄は日本海軍の

特攻兵であった―がサポート役として全面的に協力してくれた。また、初めは「小さな石碑でよい」と考えていたが、韓国の著名な彫刻家・高承観氏が碑の建立に共感し、自ら彫像を刻んでくれた。故郷の現・泗川市長も大変感動して「碑を建てるならもう少し良い場所を」と、市立公園の一角を提供してくれた。

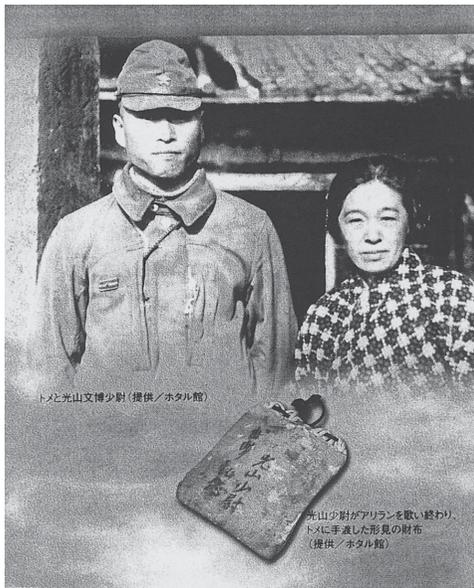
黒田さんは、「初めは、ちっぽけな石碑でもいいと思って始めたことが、様々な人達の手によってどんどん大きくふくらんでゆく。驚きを感じながらも、何かに導かれているようでもあった」と、感慨深げに述べている。

こうして、高さ5メートルの立派な慰霊碑「帰郷祈念碑」が、卓庚鉸青年の故郷・韓国慶尚南道泗川市の大浦マウル体育公園に、今年、平成20年5月2日に完成した。

5月11日が卓庚鉸青年の特攻戦死の日、命日である。韓国では、祭祀は命日の前日に行くことになっており、韓



光山文博少尉



トメと光山文博少尉 (提供/ホテル龍)

光山少尉がアクリルを敷いて終わり、トメに手渡した形見の財布 (提供/ホテル龍)

国側も全面的に協力して、5月10日除幕式を行うことになった。在京韓国大使館も「韓国大統領にこの件を知らせた方がよい」と助言し、黒田さんは、青瓦台に手紙を出したとのこと。在ソウル日本大使も除幕式にメッセージと花束を贈ることを約束してくれた。日本のさる旅行社からも「利益を顧みず除幕式参加のツアーを組もう」と申し出があり、私ら一般参加者27人が釜山、晋州経由で5月9日に泗川に入った。翌10日は午前10時から「帰郷祈念碑」建立について、日韓関係者のシンポジウムが、続いて11時30分から除幕式が行われる。

5月10日当日、我々が朝食を終えた後、旅行社の係員が「シンポジウムが

急遽中止になった。その事情説明と記者会見が10時30分から行われる」と、予定変更を知らせてきた。「どういうことだろう」と不審に思いながら会場に着くと、黒田さんは、緊張した面持ちで「強硬な反対派2団体が、何故かミカゼを祭るのか。碑の建設に断固反対する。除幕式も含めて一切の行事をしてはならない。碑に近付けば実力行使をする」と主張し、昨夜直接話合いもしたが決裂した。これまで共感して助力してくれた泗川市長も『強い反日感情があって、市当局としては一切何もできない。謝罪するが、祈念碑は撤去する方向である』と態度を変えてしまった。本当に残念であるが、これまでの努力は、決して無駄ではなかったと思う」と、最後は涙ながらに事情を説明された。

反対派、反日派がいることは止むをえない。除幕式会場で一騒ぎぐらいあるかもしれないとは思っていた。しかし、碑の建立に協力的だった、公人たる泗川市長が反対派団体の圧力に屈して、除幕式の前日になって態度

を翻すとは・・・。韓国の一部に今なお残る「事大主義」か。除幕式に参加のため、出撃基地・知覧の霜出勤平南九州市長もわざわざ来られている。会場から幾つかの質問が出た。私も泗川市当局に対して、「このような事態になったこと自体は、真に残念ではあるが、これが、日韓関係の現実であり、事実として冷静に受け止めなければいけない」と言って、以下4点について質問をした。

- ① 個人間でも、国と国との間でも、言ったこと、約束したことを守ることが一番大切であり、信頼関係の第一歩である。泗川市長、市当局はどう考えているのか。
 - ② 碑は、「撤去する方向」とのことだが、撤去するのか、否か。
 - ③ 撤去するならば、将来再建するために、市当局の責任で、碑を保管すべきであるが、どうするのか。
 - ④ 反対派は、除幕式を實力で阻止するとやっているが、我々は、碑の所まで行って見るのが可能か。
- 泗川市長はいなかったが、泗川市文化観光課長が答えた―「いろいろ質問があったので、全てに答えられるかどうか分からないが・・・」と前置きして、①の質問は無視した。そして、「これ程強い反対は予想していなかった。

反対派団体は『碑は強制撤去する』と言っており、碑が壊される恐れがあるから、(市当局が撤去して)保管すべきだと思う。碑がある現場には反対派団体が待ち構えているが、皆さんがそこに行かれないと言われれば、行かなくても止むを得ない」と。説明会と記者会見は、10時30分から始まり、12時過ぎまで続いたが、我々は、とにかく現場に行こうということで、バスで市立公園に向かった。

公園は、町中から外れて、畑が広がる一本道(車道)をしばらく行った所にあり、低い丘陵地帯にある自然公園といった感じである。公園近くの道路には、車が10数台停っており、交通整理の警察官も出て、騒々しい雰囲気である。12時50分過ぎにバスを降りて、幅4〜5メートルの、公園入口に通じる道路を進むと、警備盾を構えた制服警官隊が公園入口で阻止線を張っている。その両脇には、私服警官が多数列をなし、あるいは動き回っている。制服警官隊の後ろには、反対派団体約40人が3〜4列に横並びで1台の街宣車を使って「・・・カミカゼ・・・」とシユプレヒコールを繰り返している。道路脇の少し高い丘に登って見ると、反対派に若い人はいない。公園の方を見ると、数十メートル先に青いシート

で覆われた帰郷祈念碑(であろうか、後で確認できたが)が見える。「何とかやつと碑を見ることが出来た」と思いつつ、よく見ると、碑の周りには、警備盾を持った多数の制服警官隊が二重に阻止線を張っている。そして、黒田さんら関係者や我々参加者が、公園入口の盾を構えた制服警官隊の阻止線に近付くと、左右から私服警官10人位が飛び出して来て、盾・制服警官隊の前に、更に阻止線を張る。帰郷祈念碑までは、私服、制服、反対派、制服二

重の、実に五重の阻止線が張られている。黒田さんらは、我々も含めて、公園入口前の私服警官の阻止線の前で黙祷し、引き返さざるを得なかった。時に、13時2分。帰郷祈念碑除幕式に参加のため、卓庚鉉青年の故郷まで来たというのに、碑を目前にして引き返さざるを得ないとは・・・。日韓関係の難しさをつくづく感じた。(ここまでは、「朝鮮人特攻隊員慰霊碑、除幕中止、撤去へ」と、翌日に報道された。)

この後、近くにある新羅時代の名刹多率寺の裏山である鳳鳴山(408メートル)に、韓国側ボランティアと一緒に慰霊登山を予定していたが、我々日本人だけの登山となった。そして、山を下りると、どこからか、崔昌

根氏がひよっこり現れて「私は昭和20年4月2日、沖繩に出撃し、特攻戦死した崔貞根の弟です。兄は陸士56期で唯一の朝鮮出身でした。今日の除幕式は、一部の反対派が騒動を起こし、痛切に心が痛む。日本からわざわざ来られた皆さんにお詫びしたい。韓国にはまだこのような反日派団体や反日的考えのあることを知ってほしい」と、日本語で挨拶された(崔昌根氏については、会報「特攻」75号4頁に報告記事がある)。

また、黒田さんもいて「先程遺族数人と一緒に公園に戻ったら、警官隊も反対派も一人もいなかった。そこで、帰郷祈念碑を覆っている青いシートを



夕方5時半過ぎ、やっとシートを取り、帰郷祈念碑と対面。上部は八咫鳥をデザインしたもの

取り除き、黙祷をしてきた。遺族は完成した帰郷祈念碑を見て、心から泣いておられた」と、我々が登山中のできごとを報告された。青いシートは、反対派が碑を壊すかもしれないので、再び掛けてきたとのこと。我々は、この後多率寺の住職から法話を聞く予定であったが、失礼ながら辞退して、すぐバスで公園に向かった。

夕方5時半を過ぎていた。先程の騒ぎはどこへやら、公園は静まり返り、園内全体が、そして、青いシートを被った祈念碑が、暖かく柔らかな夕陽に包まれていた。やっと完成した帰郷祈念碑に、本当にやつと会えることが出来る・・・。黒田さんを先頭に、我々は



帰郷祈念碑に黙祷する黒田さん



テポ
折念碑のある大浦マウル体育公園入口で阻止線を張る警官隊



警官隊の後ろにいる反対派団体



警官隊の阻止線の前で黙祷する黒田さん
その後は洪鐘秘教授



折念碑(中央の青いシート)の周りにも盾を持つ二重の警官隊

足早に碑に近づいた。早速、皆でシートを取り、大きく立派な帰郷祈念碑を見上げた。碑の上部は、八咫鳥をデザインしたもので、不死鳥を表し、卓庚鉉青年が玄界灘を越えて自由に大空を飛び回ることが出来るように、との願いが込められているという。

歴史に翻弄された、さ迷える魂、日本軍人として特攻戦死から63年、戦後は祖国で「国賊」視され、親族からもひた隠しにされ続けたという、浮かばれぬ魂は、黒田さんの夢に出現してから17年、やっと彼女の尽力によって、懐かしき故郷に帰りがたのである。

卓庚鉉氏、決死の奮戦、有り難う、霊安らかなれ。黒田さん、長年のご尽

力、有り難う、帰郷祈念碑安らかなれと、黙祷を捧げた。(黒田さん製作のパンフレット等からの引用部分あり)

◇ ◇ ◇

黒田さん始め我々が韓国を離れた日の翌13日に、泗川市当局は帰郷祈念碑を撤去した、と報じられた。やはり、

やったか・。帰郷祈念碑関係者の無念さ、悲しみは如何ばかりか・。しかし、卓庚鉉青年特攻戦死の帰郷祈念碑が、黒田さんのご尽力で、5月10日、故郷の泗川市に建立された、という事実は変わらないし、消えることはない。より正確に言えば、「慰霊碑が建立され、反対派の圧力で除幕式の前日に約束が破られ、数日後に撤去さ

れた」ということ、これが歴史的事実であり、真実である。

幸い、韓国在京大使館も、著名知識人も、地元・泗川市民の多くも、帰郷祈念碑の建立に好意的だという。将来1年後になるか、50年後になるか、泗川市長らが「08年5月10日は大変失礼を行いました。改めて日韓協力して除幕式を行いたい」と連絡してくる日を待つのみである。

(付) 泗川市には、韓国有数の漁港があり、三千浦の海岸は美しい。また、戦前日本軍の飛行場があった。現在も飛行場があり、航空産業が盛んである。航空宇宙博物館があり、主に朝鮮戦争時の軍用機が展示してある。B-29爆

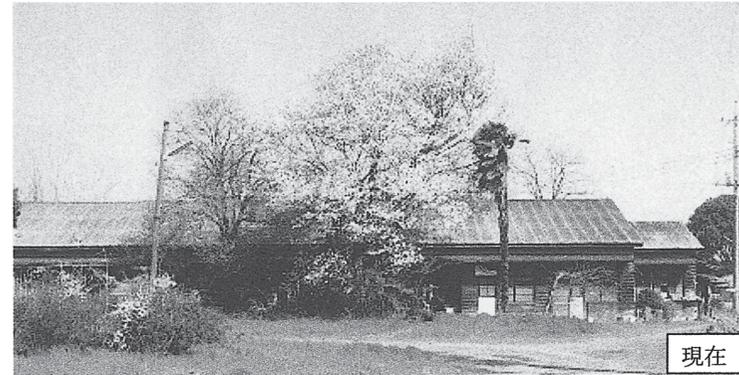
撃機の実物もあった。また館内には、スターリンが3台造って、自分用に1台、毛沢東と金日成に各1台ずつ贈ったという、大型豪華乗用車が1台(金日成用のもの)展示してある。朝鮮戦争時に捕獲したものという。

旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会

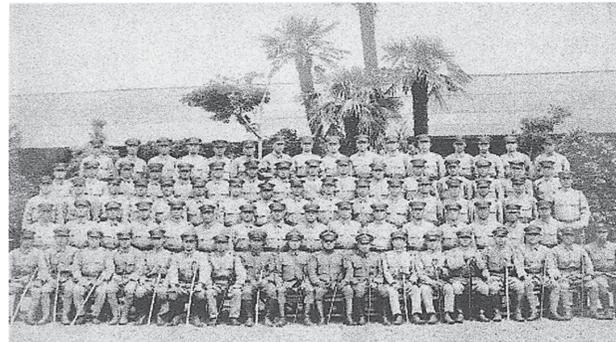
訴えている。

平成20年6月15日の「讀賣新聞」朝刊・埼玉地方版に、旧陸軍の「熊谷陸軍飛行学校桶川分教場」（桶川市川田谷）の建物の保存を求める署名運動に取り組んでいる「旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会」の記事が掲載されている。同会の会長を務める白田智子さんは当協会の理事（遺族会員）であり、昭和20年4月1日沖繩・慶良間列島南方海上の敵艦船に突入、散華された第23振武隊長伍井芳夫大尉（特攻戦死により陸軍中佐に昇進、少尉候補者20期・陸士54期相当）の次女であられる。同会は平成17（2005）年に発足したが、会員は、かつて同分教場で働いていた整備員や事務員、飛行兵・特攻隊員の遺族ら約70名で、これまで聞き取り調査等を重ねてきた結果、同分教場で訓練を受けて出撃した特攻隊員の写真や遺族との別れの情况等が明らかにになってきている。白田会長は、「限りある命を大切に、戦争を二度と起こさないため、忘れないためにも戦争の歴史を後世に語り継ぎ、平和を考える一助として、形あるものを、残せるものは残して行きたい」と保存を

求めている。同会によると、同分教場は、昭和12（1937）年に開設され、約1600名が飛行機の操縦などを学んだだけでなく、終戦直前には特攻隊の訓練基地としても使われた。現在、事務室や教室、講堂などは失われているが、兵舎や倉庫などの建物が残っている。建物の一部は戦後桶川市の管理下で、引揚者の管理下で、引揚者の住居として使われたが、昨年居住者がいなくなったのを機に、所有者である国から、同市が建物を取り壊した上で敷地約9500平方メートルを、平成22（2010）年3月までに返還するよう求められている。同会では「全国に点在した同様の施設が多くが姿を消した今、悲惨な戦争の歴史を伝える貴重な遺産」であるとして、今年2月、岩崎正男・桶川市長に保存を求める要望書を提出し



現在

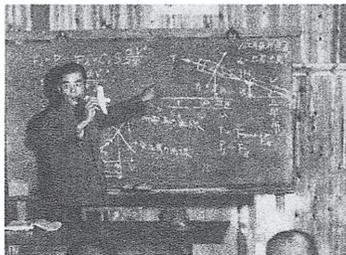


上：現存する旧本部兵舎（平成20年4月撮影）

左：召集下士官第84期卒業写真（昭和16年5月）

左下：実技風景（昭和19年）

下：授業風景（「学鷲」から）



た。また、国に働き掛けるため、署名活動を行い、要望書と共に署名簿を、今秋をめどに、県や財務省、文化庁などに提出する予定とのことである。同市は「どのような形で保存するのがベストなのかを、今後、語り継ぐ会と話し合いを重ねる。国や県などと相談しながら方向性を見出したい」とし

ているとのことである。
（問い合わせ）
事務局・埼玉県比企郡川島町表403
鈴木方
電話・409-2971-7337

夢のような丸い虹を見た 靖國の途 Uターン記

元特攻 集回天隊
少飛15期 橋本 正雄

一 潮流

徳川時代の200年にわたる鎖国政策の結果、この間、アジア諸国は欧州強国（英、仏、独等）の植民地の立場に立たされてきた中、我が国に黒船が来航するに至り、遂に明治の夜明けを迎え、日本も近代的軍隊を創る必要に迫られ、陸軍は大陸系、海軍は英系を範として創設されたが、未だ身分制度が残り、男子は帝大を出るか軍人（陸軍は幼年―陸士、海軍は海兵）の道を歩むほか出世する方途はなかった。

明治以後、東洋の諸情勢から、日本は富国強兵から国民皆兵への政策を採るに至り、幕末薩英、馬関、日清、日露等々約100年にわたり戦争が絶えず、日本の北進政策に対し、ABC Dラインによって経済封鎖をされたことにより、止むを得ず、アジア共栄圏確立の名の下に、日支事変、大東亜戦争に突入するに至った。

二 大空への指向

1 少年の生い立ち

昭和初期、中島飛行機製作所と利根川を隔てた埼玉県北部で少年時代を過ごした少年は、毎日のように中島の試作機が利根川上空を試験飛行し、爆音を聞きながら成長したことから、漠然と大空に憧れた。

小学三年生の頃、低翼単葉の飛行機（九一戦？）が利根川上空を飛行していたが、突然爆音が止まり、白い煙をはきながら町の北部利根川べりに墜落したので、放課後でもあり、友達と駆け足で墜落現場まで行ったが、憲兵に追ひ返されたこともあった。現在、墜落現場付近に海軍少佐の殉職碑が建立されている。

こんな環境で成長した少年は、大空に関係した仕事をしたいたいと思い、中学に進学しようとしたが、父親が認めてくれず、勉強が続けられるという先生の話から、昭和16年陸軍航空技術研究所に就職したが、試験の結果立川陸軍航空廠に転属となり、技能者養成所において、航空技術将校の教官の下で、一般教養と飛行機製作部門の授業（専科は原図）に明け暮れた。

隣の飛行場では、毎日飛行機の離着陸の爆音を聞くにつれ、ますます大空への指向が強まるばかりであった。

2 「赤タン」志願

その年の12月8日、自習室で、大東亜戦争突入を教官から知らされた。翌年早々、少年飛行兵を志願したいと人事担当の航技大尉に申し出たところ、陸軍に志願するなら許可するとの承認を得たので、志願票を本郷聯隊区に送付して手続きを取り、中央大学で受験し、合格通知を受けて同年9月退職。10月3日、念願の東京陸軍航空学校に入校し点呼。体育館に仮泊して身体検査、日中は私服（洋服の者、和服の者）のまま「オイッチニイ」の訓練をしながら結果待ち、3日後被服を受領。中隊編成は15中隊から20中隊とのこと。第20中隊第4区隊第4班に編入され、新設の大津教育隊へ。立川から夜行列車に乗車、初めての部隊行動、滋賀県大津市琵琶湖畔の元陸軍病院跡に新設の東京陸軍航空学校大津分校に到着。学校生活は練兵場の整地、草むしりから始まった。

学校生活も日を追うに従い、全国（北は樺太、南は台湾、朝鮮）から集まった陸軍生徒の間にも、方言（東北弁、九州弁）を理解できるようになり、人間関係も出来て、中隊幹部の指導により午前は学科、午後は体育、教練に真剣に取り組み、汗を流して人に負けないよう頑張った。中には、訓練に、内務班生活での軌道を外れて人工的に修正されて成長した者もいた。

比叡山おろしに鍛えられ、手足は凍傷となっても泣きながら剣道に励み、行軍で足に豆を作っても1日も練兵休を取らず、歯を食いしばって頑張った。やがて、陸軍生徒も板につき、冬、春夏と、學術、訓練を修め、卒業間近の9月、分科の適性検査の結果、操縦分科と決定、悲喜交々のうちに卒業して、それぞれの上級学校へ。

昭和18年10月、操縦分科生は、宇都宮陸軍飛行学校へ、校長はノモンハンの生き残りのパイロットで、顔に戦歴のケロイドが刻まれた加藤大佐殿、生徒隊は3個中隊の第1中隊第4区隊第8班、飛行場には赤トンボ（中練）、

二式単戦、一〇〇重、格納庫には敵戦闘機（バッファロー）、宮様搭乗の中練などを横目で見ながら、専ら半分は歩兵訓練に明け暮れ、冷たい北風の吹く頃になり、飛行兵の卵らしく中練の構造、諸元などの學術科。グライダ―訓練は、搭乗よりも「オイッチニイ・イッチニイ」とゴムワイヤーを引っ張る方が多かった。中には、離陸時、体と共に操縦桿を引いてしまい失速、尾翼から接地する勇者もいた。

昭和19年4月陸軍上等兵、同校那須

3 赤タン・少年飛行兵

昭和19年4月陸軍上等兵、同校那須

教育隊へ転属し、地上訓練からいよいよ中練の同乗飛行訓練開始、助教さんは白須曹長殿、兎に角、飛行規律は厳しかった。

訓練軌道を外れた何人かは即刻、通信校へ転属を命ぜられて去って行った者もいた。

規律違反と言えば、暑いさ中に袴を省略したのをチャックの締め忘れから露見し、罰として全員「禪」一つで飛行場一周を命ぜられ、哀れな姿でテクテク走りをしたこともあった。

同乗訓練11時間で単独飛行を許可され、緊張、ビクビクしながらの単独飛行、1回目離着陸はOK、続いて2回目、目測は高かったが強行着陸して富士さんの見えるような「バウンド着陸」をしたため、暫く単独飛行不許可となる。

訓練も単独飛行、特殊、編隊訓練と進み、この間、悪性キリモミの修正が出来ず殉職された某君。宙返りの単独訓練中にバンドを締めずに訓練開始、背面から落下傘降下し、パレンバンを地で行った英雄も・・・。

中練の飛行訓練は、那須山おろし、鬼怒川気流にもてあそばれながら終わり、操縦分科は戦闘要員となる。

4 外地(第二八教育飛行隊)へ

イ 南京虫の来襲

7月26日、下関から釜山に上陸し、兵站司令部から指示された旅館の大広間で就寝、消灯して間もなくアッチコッチでカユイ、カユイと言ひ出し点灯したところ、毛布と床の間に初めて見る南京虫がいる。よく見ると、柱の裂け目に一列になって上に向かつて行進しているではないか。大陸の初めての夜はこんな珍事件で安眠出来ないまま朝を迎えた。

ロ 軍用列車の中で黒ん坊

釜山から有蓋貨車に詰め込まれて石門まで1週間の旅、走り出すと停らず、停車すると半日停っている漫々のな旅、貨車の天井に吊してある「カンテラ」が、急停車で寝ている枕元に落ち、顔中油煙をかぶり黒ん坊になった勇士も出る始末。携行品を枕の先に置き、適当な物を枕にビッシリ横になっているんだから逃げる訳にも行かない貨車の旅だった。

○ 赴任先が北支の石家荘(石門)に所在の隼第一七三〇三部隊、ここで1泊して保定飛行場へ転進となる。

ハ 「ノミ」のハイジャンプの渦
中に

保定飛行場踏査に出発、飛行場入口近くの格納庫の中で状況説明があり、

外に出ると、異口同音に「カユイ、カユイ」の連発、足首付近がモゾモゾ、「ノミだ」と言い出し、再度建物に近付くとビククリ。ノミが50センチほども無数にジャンプしているのを太陽光線で視認。早速、袴をまくって「ノミ取り作戦」開始・・・。

二 滑走路付近は穴だらけ

簡易滑走路から少し離れた所々の草むらだが、他より草丈が30センチも成長している所が点々とあり、足を踏み込むと凹地ではないか。助教氏の説明では中国人の土葬の跡とか、翌日から背の高い草むらを踏んでは一輪車で土入れ作業を優先してから飛行訓練が始まった。

○ 九七戦による飛行訓練開始、余りの暑さに禁を破って生水を飲み、下痢患者が出たこともあった。

訓練も高度化し、空中射撃訓練が始まった。「射撃開始距離が遠い、もつと吹流しに接近して射撃しろ」と指摘され、次は吹流しに近寄り過ぎて回避出来ず、プロペラで吹流しをボオン・・・、こんなことから射撃成績は振るわず。

編隊・連鎖機動訓練と進み、まあ、飛行機に乗せられているのから、乗れるようになったのが11月頃。

ホ 「バッタ」の大群に遭遇

訓練最終機が着陸したところ、エンジンカバーが油でベトベト、少し経つと、機付兵がカバーの内側の凹みからバッタのベトついた死骸を軍手でかい出しているではないか、バッタの焼け焦げた死骸がバケツ1杯ぐらい出てきた。

訓練も終了、西日の沈む方向の部落の人達の何だか判らないが、騒いでいる人声が風に乗って聞こえてきて間もなく、西の空が真っ黒になっているではないか、そのうちバサバサと音が聞こえ出し、ザワザワと騒がしく近付いて来たものは、何とバッタの大群。バッタは梯団を組んでいるように黄色に色づいた草地にバサーと着陸するや、あらゆる草葉を雨の降るような音を立てて食い尽くすと、尺取虫が進むように草原を移動する行動が続き、アツという間に見渡す限りの草葉を食い尽くして大群は飛び去った。何と凄いな、凄いな。

へ 閑話休題

制限地着陸の訓練中だったか、着陸降下中の機が飛行場手前で電柱より高度が下がってしまったが、すぐ機影が見え、脚に200メートル位の電線を引きずり、キンキンと鳴らしながら着陸、電線泥棒を敢行した勇士もいた。

後で見ると、場外周の電柱数本の電線が切れ、場内側に傾いていた。

5 第十九練成飛行隊へ

12月になり、二八教飛から80名、第一七三二七部隊へ転属。

隼の訓練開始。引き込み脚、操縦桿が重く、短いこと、爆音の大きいことで、まず驚く。射撃訓練のため離陸したが、吹流しに対する角度が浅過ぎたり、深過ぎたりで、射撃のタイミングが合わず、残弾を急降下しながら、目標をとらえずに盲射撃したことも幾度か。

イ 黄砂の洗礼

昭和20年の早春、一式戦の訓練を終了して着陸した者から「そのうち、黄砂が来るゾ・」とのこと、訓練中の機が続々と着陸して来るではないか。間もなく強風に乗って黄砂の来襲、いやあ、初体験だっただけに、すごかったの一言に尽きた。

ロ 昭和のカチカチ山事件

吹流し射撃訓練たけなわの頃、残弾を残したまま着陸した某君、エンジンをやめると機前に補給車が到着して補給作業を始め、ホースを伸ばしたところ、機銃から1発盲発。これが伸長したホースに命中し発火。ホースの口先を持っていた飛行兵は、転げ落ちるよりに車上から降りると、火災と黒煙モ

クモクと凄いこと、勇敢な運転兵は、火災・黒煙を背負う補給車を数百メートル運転移動させ、消火作業も効果なく、タンクの爆発の恐れがあったことから手に負えず、暫くの後、タイヤまで焼けた無残な姿をさらした一幕も見受けられた。

○ 特攻 隼梓弓隊編成。

3月、将校3名、同期飛行兵9名、計12機編成、出陣後出発。

○ 5月、同期飛行兵五十数名、内地防空戦隊要員として離隊、出発。

○ 特攻 隼回天隊編成。

6月、将校1名、同期飛行兵5名、計6機編成、特攻訓練開始。

7月、第五航空軍令下二二戦隊へ同期飛行兵4名転属。

同じく八五戦隊へ同期飛行兵4名転属。

したがって、飛行兵は、隼回天隊員5名、公傷1名、計6名のみとなる。

ハ 特攻訓練中、滑圧計ゼロ

特攻訓練も本格的となり、飛行場端に図示した船型に対する降下角度を主とした攻撃訓練の連日、朝になっても耳鳴りが残る猛烈さだった。

実際訓練として、ターナー港外に停泊している実物(貨物船のうち最大と視認した船)に対しての接敵、急降下訓練を船首、船尾、側方からと連続数

回実施、翼信号により訓練終了。帰隊のため編隊を組み終わり、点検をしたところ、既に陸地上空にあったが、滑圧計ゼロ、エンジンの調子は若干の振動のみで異常なし。しかし、すぐ降下姿勢を取り編隊の前に出て、異常信号を送り、編隊離脱、一路天津飛行場方

向へ機首を向け、緩降下しながら操作したがゼロ指示、エンジン停止に備えて不時着地点を探したが、翼下は延々と湿地帯のみ。

この間、エンジンは絞り気味だが、変調なく、ハラハラしながら約30分。

前方に天津飛行場が視認され、ホッとす。飛行場上空に達した時、高度は約300メートル、不時着信号を送り、場周半周して不時着。ピストに誘導され、飛行場司令に不時着申告。整備の間、ピストにおいて待機。暫くして整備完了との連絡があり、整備下士官から整備の結果「飛行中、エンジン架と滑圧計のパイプが振動により接触、磨耗により穴が開き、液漏れによるもので、計器交換、試運転の結果、異常なし」との説明があった。

出発準備が完了したので、司令に整備のお礼と帰隊申告をしたところ、「P五十一の来襲時間帯だから、発射準備と索敵警戒を十分にしよう」との指示を受け、離陸、場周飛行中に砲の装

填操作を完了した。不時着前の気分と違い、エンジン快調で、警戒しながら下のキラキラする湿地帯を視認しつつ飛行を続けて帰隊した。

二 離陸した途端、エンジンがプスン

前の搭乗員から「背面になるとエンジンが停まるが、姿勢が変わると異常なし」との申し送りがあり、暫く試運転の後、訓練開始の指示が出たので、若干出発線をずらして発進し、浮揚離陸したので、脚入れ操作に移ろうとした途端、「プスン」という音がして黒煙とともにエンジンが完全に停止。浮

力がなくなり、すぐ接地して草地を滑走したが、前方に引込線があり、線上に無蓋貨車が連結したままだったの

で、これに衝突しないよう、速度のあるうちから右へ右へと方向を変えたので、貨車の手前で土盛り

りに脚を取られ、尾部からフワーと持ち上がって転覆、風防の隙間から這い出たところ、始動車でとんで来た者から「怪我はないか」と聞かれたので、「転覆したが身体異常なし」と報告。

数日後、エンジン停止の原因は「重

力弁の上りっ放しに起因したガス欠によるもの」と判明した旨、兵器委員から説明を受けた。

○ 7月、同期少年飛行兵40名着隊。

○ 特攻 隼回天隊、出陣。

7月25日、唐山飛行場出陣、錦県にて補給後、奉天北陵飛行場へ前進。

8月1日、新義州飛行場へ前進。

広島に新型爆弾投下の情報・・・

8月9日、平壤飛行場へ前進。

ソ連軍南下の情報・・・

ホ 飛行中、突然の目潰し

8月13日、いよいよ雲行き怪しくなり、八五戦隊所在の金浦飛行場へ前進するため、九五練特攻12機を送り、離陸開始・・・第一旋回を左に取り、姿勢を少し抑えたところ、突然、オイルが吹き出し、風防が真っ黒、前方が全く見えなくなりました。

何が何だか分からず、本能的に機首を下げ、異常信号、翼を振りながら降下、脚出し操作後、離陸方向からの反対着陸を決意。エンジンの調子は問題ないようだが、着陸姿勢を取り、高度から判断して滑走路中央に接地すればと降下中、手袋で風防の外側を拭おうとしたが、手を飛ばされて効果なく、全く視界がきかないまま目測を取り、送り風であったが、予測地点に接地した。ところが、進行方向前方に九九双軽が大同江沿いに何機も連なっている状況から、このままでは衝突の恐れ大と判断し、接地してすぐ機首を右へ右へとひねり、双軽の鼻面先をかすめ、

接触することなく、双軽の翼端前で停止した。

オイルの吹き出し原因は、何と、オイルを補給後、オイルタンクキャップの締めがあまく、試運転時は滑温も上がらなかったが、「赤ブースト」離陸上昇中、滑温とオイル膨張により「オイルキャップ」が脱落したものと後で判明したが、こんなことで前進中止となる。

もし、このまま前進し、金浦飛行場に到着していれば・・・その頃、金浦飛行場は、敵艦載機(グラマン他)の来襲を受け、迎撃に離陸直後を狙われた八五戦隊中村少佐、西野准尉、少飛先輩の荻山曹長(少9期)、立石曹長(少10期)、猿渡曹長(少12期)の尊い戦死、終戦2日前に失ったとのこと。

6 最後の飛行

このことを知った時、天命か、運命か、生かされる方向へ向かったのかと。幸か、不幸か、こんなことで翌14日夕、全機金浦飛行場に着陸。一方が山、一方は崖の、離着陸の難しい飛行場だったが、一夜明けた翌15日、驚天動地の終戦となり、再び飛び立つことはなかった。

玉音放送の2時間前、第五航空軍司令部へ、司令官に着隊申告。その際、動天の話は一言もなく、飛行場に帰っ

たら玉音放送・・・

三 翼を失い、復員

米軍の命令で晋州へ撤退。操縦桿を鉄に持ち替えて農作業・・・辛い長い毎日。10月7日、復員命令により釜山へ。復員船は、大陸に來たときと同じ「興安丸」。翌8日夕、山口県仙崎港に上陸。部隊解散・・・そして、全国へ四散した。

かくて、丸い虹を見た大空の夢も去り、靖國への途もUターンさせられ、夢想だにしなかった戦後の人生を歩むこととなった。

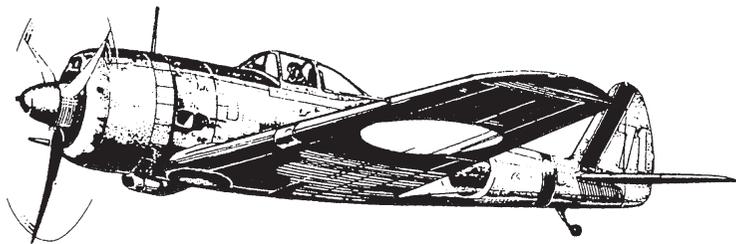
四 むすび

教飛時代、共に飛行訓練に励んだ同期生で、特攻(九七戦) 振武隊(若桜・必殺・天剣隊)は、沖繩周辺に散華しているが、当時の若い姿の儘で儼に残っている。

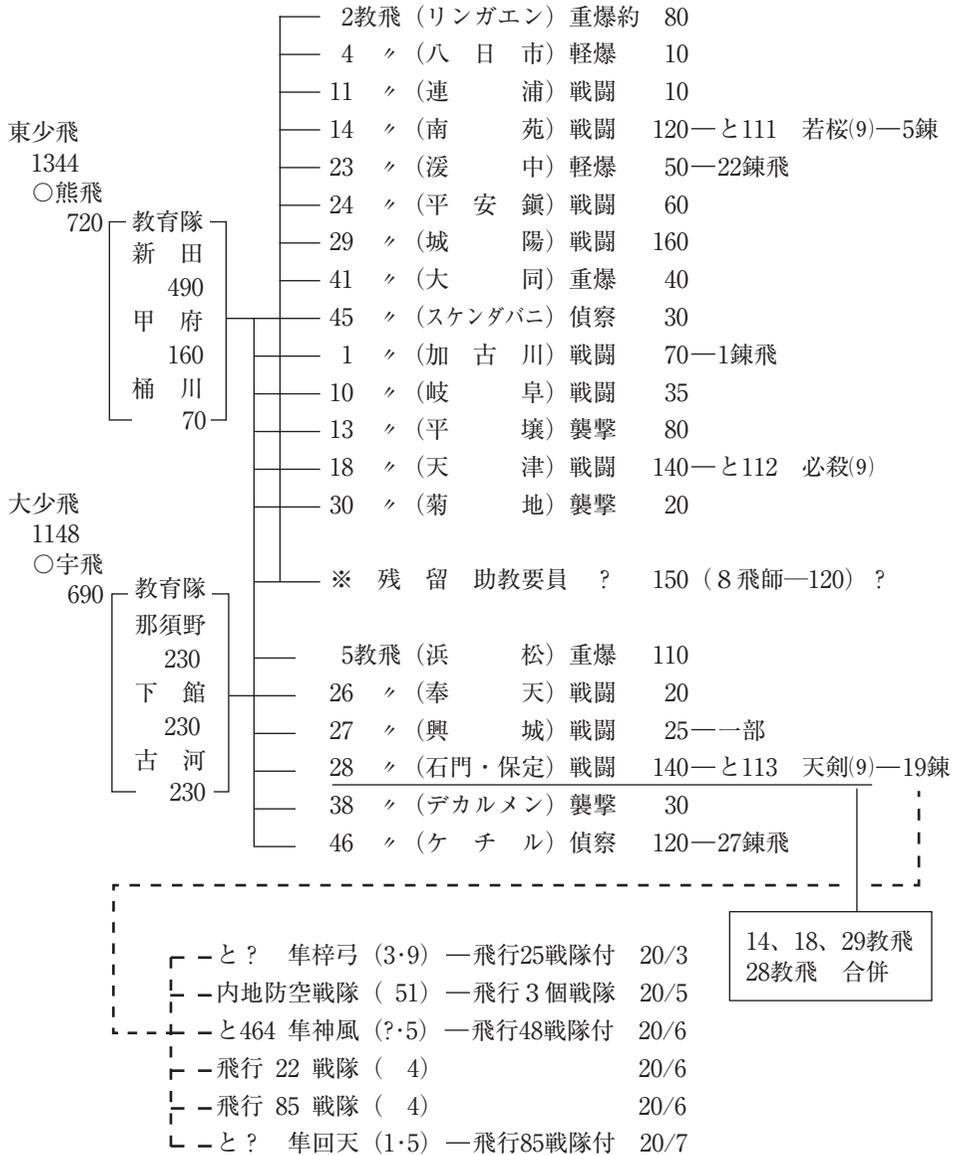
訓練中に殉職した同期生共々、只々運命とはいえ、散華・殉職した戦友の御冥福を祈るのみ。 合 掌

一式戦闘機二型「隼」 (キ43Ⅱ)

陸軍 設計・製作・・・中島
〔型式・構造〕 単発 低翼単葉 全金属製 応力外皮構造 ファウラー式蝶型空戦フラップ 引込脚 全長・・・八・九二m 全幅・・・一〇・八三m 全高・・・三・二七m 主翼面積・・・二一・四〇㎡ 乗員・・・一人 発動機・・・中島一式(ハ1115) 空冷式 複列星型二四気筒 一一〇〇／一一三〇



—少飛15期— 群 鷲 の 巢 立 ち — 昭和19.8 ~ 20.8—



(参 考)

分 科	甲 種 (比率)	乙 種
操 縦	1420 (57%)	2000
通 信	502 (20%)	2500
整 備	570 (23%)	3500
合 計	2492 (100%)	8000

世界に唯一 現存する五式戦

菅原 道熙

『航空ファン』の平成20年5月号に掲載された「発掘！日本航空史」（第5回）（知られざる五式戦・戦士）で取り上げられた岸 由男軍曹は、平成18年10月に当協会が実施した、フィリピン特別攻撃隊発進基地等慰霊巡拝旅行に参加されている。

記事の内容は、殆ど知られていないことで、終戦前後の埋もれた史実を会員各位にお知らせすべく筆を執った。

1 米国に運ばれた五式戦

陸軍の三式戦闘機（昭和16年12月制式採用、キ61ⅠⅡ型「飛燕」、川崎航空設計・製作、16〜20年の間に各型合計約2800機が生産された。）は、ドイツのメッサージュミット109戦闘機に使用された新型強力液冷式発動機（ダイムラー・ベンツ社製DB-601型1150馬力）を国産化（川崎航空機が製造権を獲得、川崎二式ハ-40型1100〜1180馬力）したもので、当時としては珍しい液冷式戦闘機であった。メッサージュミットに劣らぬ性能を発揮しながらも、意外に発動機

の故障（調圧弁不調等）と整備上の難点が多く、稼働率が悪いという欠点があり、パイロットの間でも、信頼性に欠けるとして余り評判が良くなかった。特に昭和18年に、キ61型の性能向上型であるキ61Ⅱ型改に装備した川崎ハ-140型（1450馬力）液冷式発動機に故障が多く発生したため、発動機の生産が遅れがちであったが、機体の生産は順調に進み、その結果、350機以上の首なし機体が出来てしまっ

た。陸軍では、これを解決するために、昭和19年10月、キ61の機体に、百式司令（一〇〇式司令部偵察機（双発）キ46ⅠⅣ、設計・製作三菱重工、昭和14年12月に試作Ⅰ型機が完成、16年に発動機を三菱一式ハ-102型950〜1080馬力2基に換装したキ46Ⅱ型

機から性能が飛躍的に向上し、更に三菱四式ハ-112Ⅱ型1350〜1500馬力2基に換装したキ46Ⅲ型機等性能が優れ、昭和20年2月に試作Ⅳ型2機が北京〜東京間を3時間15〜35分、平均時速700kmで飛行したという驚異的な記録を有する。昭和14〜20年の間に各型合計1742機が生産され、大東亜戦争の全期にわたり、北はアリューシャン列島から南は西南太平洋の全域において活動した。）キ46Ⅲ型

機に装備した三菱ハ-112Ⅱ型空冷式発動機（1500馬力）を装備したところ、重量バランスが予想以上に良く、空戦性能も一段と向上した新鋭機に生まれ変わった。そこで昭和20年2月、陸軍ではこれを制式採用して五式戦闘機（キ100型）とした。本機は、当時本土上空を我が物顔に跳梁していたグラマンF6FやP-51に勝る高性能を有していたが、時既に遅く、華々しい戦果を挙げずして終戦を迎えたことは、返す返すも残念なことであった。なお、

本機には一型（甲・乙）と二型（排気タービン装備）とあるが、二型は試作機3機が制作されたのみであった。昭和20年に二型の3機を合わせて396機が生産された。

米軍は、日本陸海軍機すべての機体の特徴を把握し、機別にコード・ネームを付けていた。進駐して来た米軍の航空技術センターの調査員は、内地で五式戦を見て、未把握の機種であることを知って驚いたという。第一線の米軍パイロットは、日本の新鋭戦闘機の出現を知っていたであろうが、正式にセンターまでは情報が届いていなかったことを示すものである。

米国の航空技術センター調査団と相前後して、英空軍を主体とする連合軍航空技術情報隊も来日して調査に当たっていたが、重点は東南アジアに移した方が良いと判断して、サイゴン近辺を調べ、日本陸軍機の中で保存状態の良い五式戦に注目した。川崎航空機製造（製造番号一六二三六）の一型乙で、本機は昭和20年6月末に、各務原の岐阜工場で製造され、7月前半に陸軍に引き渡されたようである。そして、岸軍曹が終戦直前にサイゴンに空輸したものである。

2 英国に渡った五式戦

調査団は、評価飛行の操縦者として岸軍曹を指名して、昭和20年11月初めから試験飛行を開始した。正式の試験飛行は、タン・ソン・ニエット北方24kmにあるピエン・ホア飛行場で行うことになって、11月26日朝9時頃離陸し

たが、ビエン・ホアで着陸態勢に入っ
て脚が出ず、急降下等あらゆる対策を
取ったが駄目で、元の飛行場に戻り、
燃料を使い果たしてエンジンを完全に
止めて着陸し、岸軍曹は無事機外に脱
出した。

調査団は方針を変更して、プロペラ
その他破損部分を他の機種から調達
し、年末に一応の修復を終えて本土に
回送した。どこかの基地で調査・補修
が行われ、現在はロンドン北北西近郊
のヘイドン空軍基地に、エンジン可動
の状態で展示されている。

3 岸軍曹の回想

岸軍曹は、各務原を根拠地とする航
空輸送部第7飛行隊に所属し、昭和19
年2月から1年余は、比島クラーク基
地において、南方作戦全般に、最後は
比島作戦に協力していた。

昭和20年1月に、悪天候の中、三式
戦の空輸中、ネグロス島に不時着して
負傷、暫くしてクラークに戻ったとこ
ろ、その間に部隊はルソン島北部のエ
チアゲに引き揚げてしまっていた。残
された岸軍曹以下は、残置されていた
九七重を修理して、指揮命令系統の混
乱する中を屏東(台湾)に移動し、そ
こで赴任途中に足止めされていた隊長
をエチアゲまで運んだりした。

2週間位屏東にいて沖繩に飛び、南
方へ向かうべく待機していた四式重を
サイゴンに空輸してそのまま仏印に留
まった。

仏ヴィシー政権が倒れて、北部仏印
で接収した仏軍機の試験飛行を行った
りしていたが、再びサイゴンに戻った。
比島以来の操縦士仲間は、内地に戻っ
て特攻要員になったが、岸軍曹のみが
南方に残ることになった。

7月に入って、小牧から五式戦をサ
イゴンに空輸することを命じられた。
予想外の高性能を発揮した五式戦を南
方軍に示して、士気を鼓舞することと、
併せて、南方にストックされている空
冷発動機を活用して三式戦を五式戦に
変更する計画もあったらしい。

7月末に、小牧、米子、済州島を経
由して、一気に東支那海を横断して上
海近郊の大場鎮飛行場に着陸した岸軍
曹は、8月10日頃台中に入った。13日
に香港に近い宝安着、次に向かう海南
島の海口飛行場は、敵の空爆で滑走路
が使えないので、14日夜に三垂飛行場
に着陸してみると、出発に当たって予
めその旨の連絡を頼んでおいたのに、
海軍の飛行場では、そんなことは聞い
ていないと押し問答をしていると、山
中に籠もっていた陸軍から自転車の伝
令が到着、岸軍曹は海軍に冷笑されて

悔しい思いをしたという。

翌日、8月15日早朝、朝食も摂らず
に離陸、カンボジアのコンポンクーナ
ン着、正午に重大放送があると聞かさ
れて、それまでの戦場体験から、「ああ、
負けたのだな」と直感した。ブノンペ
ン飛行場に着陸してみると、既に大騒
ぎになっていたので、直ちにサイゴン
に戻った。

着陸前に機上から眺めると、黄色の
将官旗を付けた車が数台止まっていた
ので、駆け付けた兵に、自分の出迎え
としては豪華過ぎるなどと語り掛ける
と、板垣大将が内地へ帰られるのでは
ないかと言うので、岸軍曹は思わず、
「もう逃げたのですか」と口走って、
近くにいた上官から大目玉を食らった
そうである。実際は、第七方面軍司令
官である大将が、シンガポールから急
遽飛来し、南方総軍司令官寺内元帥以
下総軍上層部から情報を収集して、再
び任地へ戻ったところであったのであ
る。

16日朝、寺内元帥の副官から、元帥
が、貴官から五式戦の話聞きたいと
のことだから、待機するようにと言わ
れたが、結局取り止めになってしまっ
た。

8月20日頃であったろうか、閑院若
宮殿下が帰国される飛行機に同乗を命

じられたが固辞したので、上官で、ヒ
ゲの愛称で親しまれていた宮崎中尉が
乗り組んで帰国し、岸軍曹は捕虜の身
となった。

間もなく英軍に呼び出されて、五式
戦に乗れ、と言われて断った。中尉位
の将校と押し問答をして物別れとな
り、替わって老兵士が出てきた。連合
軍は、この者の名譽を損なうようなこ
とをしてはならない、という証明書に
サインをして渡してくれた。何と老兵
士と思っただけは、グレーシー中將で、
マウントバットン中將に比肩する將軍
であった。

そこで、岸軍曹は、言われるままに
試験飛行を行った。朝夕ジープで送迎
されるので、そんなに自分を監視する
のかと抗議したら、重要人物だから特
別扱いをしているのだと言われて、運
転手のニコラス軍曹をてこずらせたこ
とを悔やんだ。この間、トントン准將、
ピッツバーグ中佐(英軍パイロット)、
マクマランド大尉等大勢の人々の世話
になった。

一方、昼食時に、アイスクリームを
運んで来た女性士官は、食器を、あた
かも犬に餌をやるように置いていっ
た。複雑な心境だったのである。

そのうちに、五式戦と一緒にロンド
ンまで行かないかと言われたが、英本

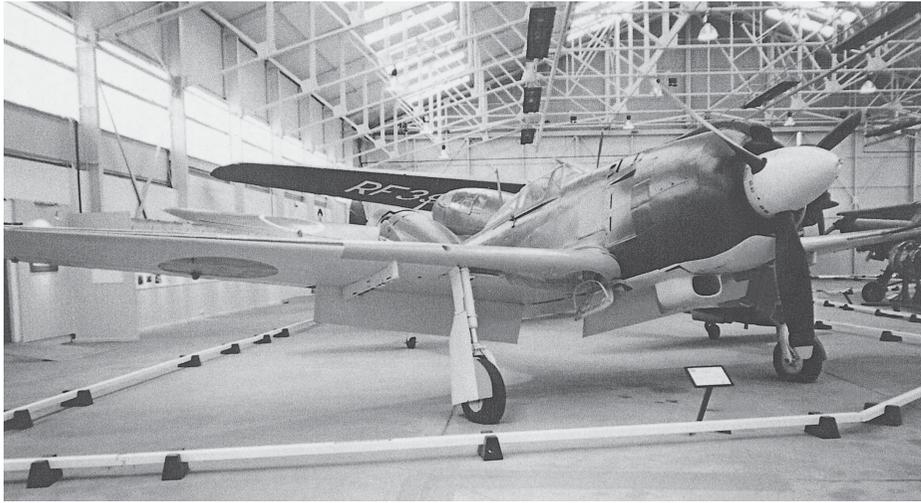


五式一型戦闘機 (キ100-1) ~川崎航空機製~ (1996年7月13日、英国コスフォードエアミュージアムにて、岸 由男氏撮影) ~全幅12.00m、全長8.82m、全備重量3.495Kg、発動機ハ-112-II、空冷二重星型14気筒、離昇出力1.500馬力、最大速度580km/h、巡航速度400km/h、航続距離1.400Km (日本航空機総集より)

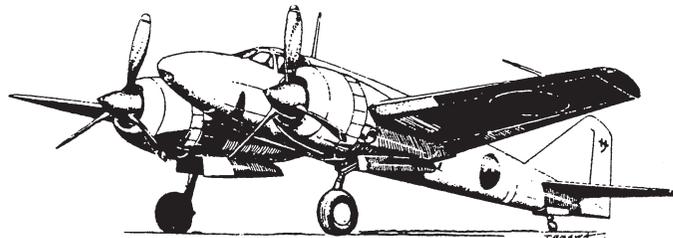
国で飛行機と共に見せ物にされるのは嫌だと、断固反対して、昭和21年5月に復員船に乗り込んだ。

この時、岸軍曹だけは、黒塗りの乗用車で埠頭まで送られたので、元春月艦長の復員船長は「ここは、日本が負けたのではなく、勝ったのですか」と話し掛けてきて、岸軍曹も「私自身良く分かりません」と答えて大笑いになった。その時船内では、リンゴの歌が流れていたことを覚えている。

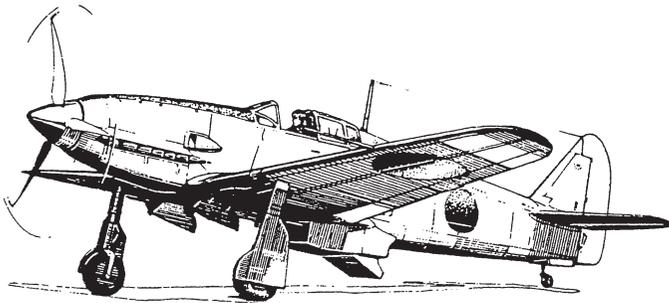
(注) 岸由男氏は、クラーク特別区内にあつたために、昔の姿のままで残っていたマバラカット西飛行場跡を訪れて、激しかった戦場の日々、亡くなられた戦友の方々に想いを馳せて、万感胸に迫るものがあつたと、手記『特攻』71号、49頁)を寄せられている。



あつたために、昔の姿のままで残っていたマバラカット西飛行場跡を訪れて、激しかった戦場の日々、亡くなられた戦友の方々に想いを馳せて、万感胸に迫るものがあつたと、手記『特攻』71号、49頁)を寄せられている。



一〇〇式III型司令部偵察機 (キ46III) 陸軍
設計・製作 三菱



三式戦闘機I~II型 (キ61I~II) 『飛燕』陸軍
設計・製作 川崎

ガダルカナルで散華した 軍神若林東一偉勲顕彰 —後世に伝える方策—

田中 賢一

我が期(陸士52期)の偉材若林東一は、その出身から異色だった。身延中学を出て、徴兵で甲府の歩兵第四十九聯隊に入った。下士官を志願し、仙台の教導学校では成績優秀、教育総監賞をもらい、軍曹にまでなったが心機一転、士官学校を受験し、昭和11年4月士官学校予科に入り、我々の同期生となった。明治生まれは彼一人、我が期の平均年齢より6歳も年長だった。そして、予科、本科とも恩賜だった。

昭和14年9月士官学校を卒業し、同年11月静岡の歩兵第三十四聯隊で少尉任官、翌年新編の歩兵第二二八聯隊に転じ、大東亜戦争勃発時は中隊長だった。聯隊の属する第三十八師団は、開戦と同時に香港攻略に任ずるのだが、若林中隊長は偵察に出て、九竜半島要塞の要点が手薄なるを知り、独断攻撃奪取という偉勲をたてるが、主題とは直接関係がないので省略する。

その後師団は蘭印に作戦し、更にガ島に転用された。ガ島にはそれまで一木支隊、川口支隊、第二師団と、所要

に充たない兵力を逐次注ぎ込み、補給も続かず、悲惨な状況になっていた。そこで、今度は第三十八師団を主体とする部隊を船団で一挙に上陸させようとしたが、彼等の海空の勢力がそれを不可能ならしめた。

若林中隊長は、昭和17年11月5日、駆逐艦でガ島に上陸し、同月20日見晴台を占領し、連日熾烈な砲撃を受けるも一歩も退かず、翌年1月14日に戦死するのであるが、その間71日、激しい戦況下に在って52日もの日記を書き残した。

ところで、昨年私は「かかる中隊長ありき/ガダルカナルで散華した軍神若林東一」と題する百頁足らずの本を上梓した。この本は、各頁の上段には彼の日記を、下段にはその解説や全般状況等を述べたものである。

日記は、部下に対する愛情と不屈の敵愾心に溢れた達意の文章で書かれており、是非読んで頂きたい。

建碑のこと

本は読んだとき感銘を覚えても、一代限りなので、金石に刻んだ碑を何処かに建てようと、彼の出身地山梨県の護国神社に手紙でお願いした。ところが、境内には多くの慰霊碑はあるが、全て部隊のもので個人の碑はない、宮司の一存では決めかねる、という回答

だった。彼の故郷という考えもあったが、南巨摩郡南部町内船なるところが、行ったことはないが身延線の小駅で、人目に付かない所では意味がないと、名案が浮かばずに、一月ばかりが経った。10月の中頃になって、護国神社から電話で、建碑の件相談したので来てほしいと言ってきた。そこで10月23日、初めから私と共にこの事に携わってきた三沢鎌一君と二人で出向いた。宮司の羽中田進氏は、大層積極的で鳥居をくぐった右側の良い場所を与えて下さった。ところが、それから数日後、相棒の三沢君が脳梗塞で倒れ、未だに意識が回復しない。

碑の構成

にしたため、新聞紙大に印刷して掲げた。絵は陸士55期の野副直行氏にお願いしたところ、8号の油絵二点を描いて下さった。一つは激戦の合間に日記を執筆しているところ(因みにガ島にあること71日の間52日の日記を書き残している)。もう一点は昭和18年の元旦、敵の砲撃の合間に宮城の方向に遥拝をしているところである。野外陳列ケースには入り切れないので、後者は今のところ顕彰施設の隣にある資料館に展示することにした。

この碑は慰霊碑ではなく、顕彰する碑と考えていた。それがためには、彼の遺徳を顕彰する文章と、見る人の感情に訴える絵を掲げたいと思った。そこで、野外設置の屋根付き陳列ケースを主軸としたが、人を呼び込むためには標柱も必要と思ひ、「軍神若林東一顕彰碑」と刻んだ金属板を石に嵌め込んで建てた。この文字板は、私の懇意にしている元日大生産工学部長の大谷利勝氏が開発した特殊な技法で铸造してくれた。代金は取らないばかりか、逆に多額の協賛金を下さった。

同期生の故谷晃夫君は、野重でガ島生き残りだったが、生前に描いた絵があるので、それをコピーして額に入れて掲げた。若林は昭和18年1月13日夕刻、砲弾の破片を頭部に受け、重傷を負ったが、兵に扶けられて大隊長西山少佐の所に報告に行った。谷の絵は、その場面を描いたものである。なお、若林は後方に下がって治療するようにという、大隊長の勧めを振り切つて陣地に戻り、翌日戦死してしまふ。

顕彰施設は年末に出来上がったが、除幕式を寒い時期に行つても人の集まりが悪いと思ひ、宮司の助言もあつて、今年の3月30日に建立報告祭として行うことにした。

同期生は、準会員と付添いを含めて8名しか出られないので、借行社、郷

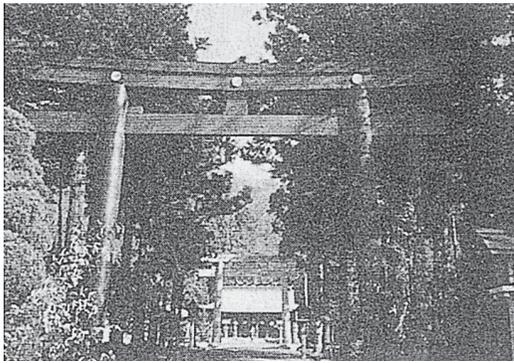
軍神若林東一顕彰譜

若林東一八明治四十五年西八代郡栄村(現南部町)二生ル、身延中学卒業、現役兵トシテ甲府ノ歩兵第四十九聯隊ニ入營、下士官ヲ志願シ軍曹マデ進ミシガ、陸軍士官学校ヲ受験シ、昭和十一年四月入校、十四年九月卒業シ少尉ニ任官ス。

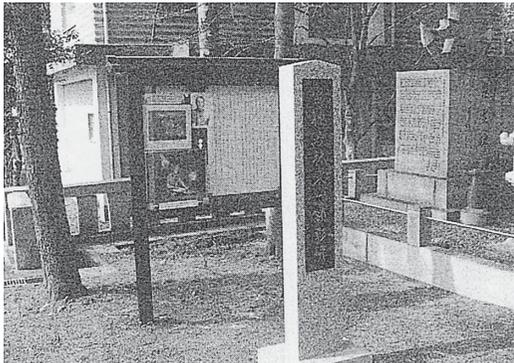
大東亜戦争勃発時ハ中尉ニテ、第三十八師団歩兵第二二八聯隊第十中隊長トシテ参戦セリ。香港攻略ニアタリ、第二十三軍八九龍半島ノ要塞地帯攻撃ニ、強力ナル砲兵ヲ以テ徹底的ナル砲撃ヲ行イタル後、若林ノ属スル師団ヲ攻撃前進セシムル計画ナリシガ、若林中隊長ハ偵察ニ出テ敵配備ノ欠陥ヲ発見シ、自己ノ中隊ヲ以テ独断突入シテ要点ヲ占領セリ。聯隊ツイテ師団モ攻撃発起シ、作戦ノ進捗ヲ一週間モ早ムルヲ得タリ。

十七年十一月師団ハ南太平洋ノ孤島ガダルカナルニ転用セラレ、若林中隊長ハ十一月五日駆逐艦ニテ上陸シ、見晴台ト呼ブ要点ノ確保ヲ命ゼラル。ガ島ニハ既ニ第二師団等ガ上陸シアリシガ、補給続カズ悲惨ナ状況ヲ呈シアリ。若林中隊長ハ熾烈ナル砲撃ニ耐工補給殆ド絶エタルニ、陣地ヲ固守シ一歩モ引カズ。

後に続く者を信ず ノ一語ヲ残シ翌十八年一月十四日戦死ス。
コノ一語 当時全軍ニ伝エラレ土氣ヲ鼓舞セリ。



山梨県護国神社 甲府市岩窪町



友連、英靈にこたえる会、特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会及び自衛隊に呼び掛けて約70名の参加申込みを得たが、拝殿は収容出来るが、直会の部屋は45名しか入れないので、25名には神事だけにしてもらう断り状を出した。

建立報告祭

神官の祝詞奏上に続いて私が祭文を奏上した。その後、前橋から参加した高橋啓作氏が自作の詩を吟じた。この人は騎兵第十四聯隊で、私と共に北支の戦場に在った間柄、少候24期、吟詠界では名の通った人である。

軍神若林東一命追悼詩

万里遠征天命空 異郷埋骨佳誠忠
太平今日是誰續 恭頌祭壇追悼中

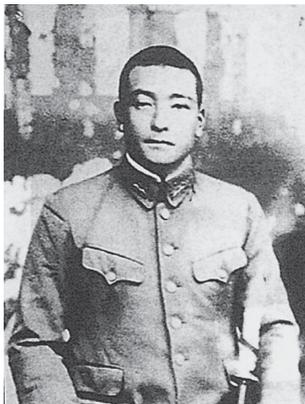
なお、神前ではこれだけで、次の短歌を直会の席で詠じた。

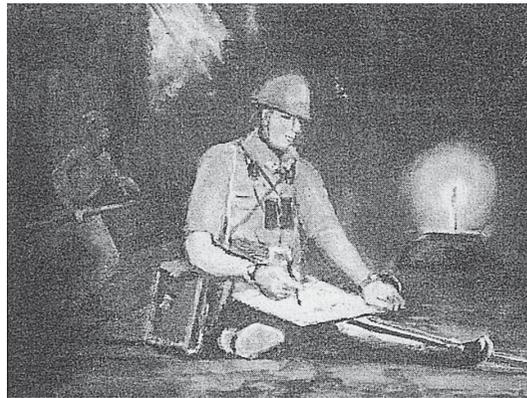
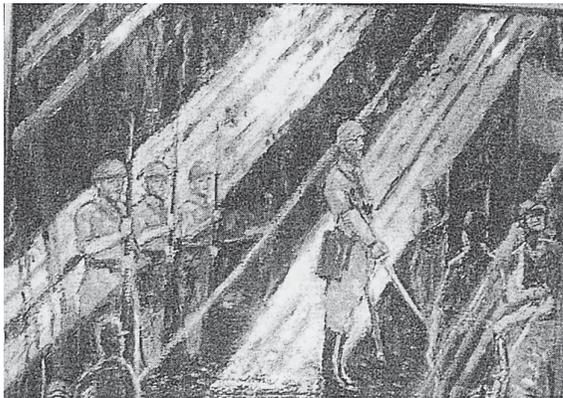
国思ひ部下を思ひて只管に
後に続くを信じ君ゆく
続くものありと信ぜし軍神に
うつし世の吾何とこたえん

この祭典で特に嬉しかったのは、現職の自衛官が大勢参加してくれたことである。即ち第1師団長、隊区担当部隊である富士の第1特科隊、山梨地方協力本部、富士学校等から11名も参加してくれた。自衛隊との関係は後で詳しく述べる。

若林東一軍歴抜

- 8・1・2 歩兵二等兵 歩兵第49聯隊
- 8・7・10 歩兵一等兵
- 8・12・1 歩兵上等兵
- 仙台教導学校入校
- 9・11・22 同校卒業、教育総監賞受賞
- 9・12・1 歩兵伍長
- 10・12・1 歩兵軍曹
- 11・4・1 士官学校予科入校
- 14・9・7 士官学校卒業 恩賜下賜
- 14・11・1 歩兵少尉任官
- 15・3・1 歩兵第34聯隊補充隊付
- 15・3・14 歩兵第二二八聯隊付
- 字品出港
- 南支で各種作戦に従事
- 15・12・1 中尉 第10中隊長
- 16・12・8 大東亜戦争参加 香港攻
- 略
- 17・1・12 ジャワに転戦
- 17・11・5 ガダルカナルに上陸
- 18・1・14 見晴台にて戦闘
- 戦死

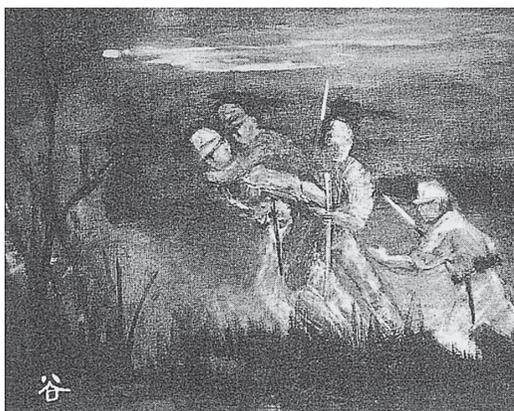




—後に続く者— 自衛隊員に与えた影響

この書物の副題に「かかる中隊長ありき」と付けたのは、自衛隊員を意識したのだった。また、軍神が「後に続く者を信ず」と言い残したことに応えるためにも、自衛隊員に若林の精神を継承してもらわねばならぬ、と期するところがあつた。

初め千部発注し、8月末に出来上がったので、早速、山梨県護国神社に送って建碑のをお願いした。しかし前途のように、直ぐには承諾がもらえなかった。そこで、益々自衛隊にという考えを強くし、先ず久留米の幹部候



谷

補生学校に700部送った。年間卒業生は約600名と聞いたので、卒業して持ち帰ればこれで全部隊に行き渡ると考えた。そして来年も何とかして数だけは送ろうと考えていたところ、学校では学生全員に読ませた後、引き揚げて来年も使うようにしていると聞いた。番匠校長とは会ったことはないが、度々手紙ももらい、先般の護国神社における建碑報告祭に、「陸上自衛隊幹部候補生学校としても『後に続く者』をしつかりと育成して参りたいと存じます」という祝電を寄せてくれた。

その後、建碑のことが具体化して、同期生や共鳴しそうな人に建碑の計画を添えて本を送ったところ、建碑の予算を越す協賛金が集まった。そこで、500部ずつ2回増刷し、かつて私が在籍した部隊等に概ね中隊に1部の見当で贈呈し、読後感を求めた。4月初旬現在で76点寄せられている。全員に求めたわけではないのに、千歳の第7師団では、全中隊長56名分を送ってくれた。

その後主動職種だけであるが、近く中隊長になるであろう富士学校のAOC学生用として、200部を寄贈した。精神教育に使うということで、山梨県護国神社の報告祭に担当教官が参加している。

寄せられた読後感を通読してみると、かえって当方が教えられることもあるが、ここに全部を掲載することは不可能なので、一つだけ披露してみる。その一つは、幹部候補生学校から寄せられた10通の中にあり、この人は既に卒業して第1特科隊に戻り、先般の山梨県護国神社における行事に参加している、大出勝治3尉である。

「今まで読んだ歴史書と異なり、本人の日記という形であつた事が新鮮だつた。内容については、困苦欠乏の日々であるにも拘わらず、絶える事のない勝利への信念、部下への深い愛情、日々の苦闘の様相が克明に記されており、それは想像を絶するものだった。そのような苦しい状況にも拘わらず、内容にユーモアがあり、若林大尉の懐の大きさが感じられ、一流の指揮官とはかくあるべきだと、大きな目標となつた。現在においても、このような中隊長であれば、部下は任務遂行に対して命を惜しまないだろうと思う。

日記の中で頻繁に『飯』の話がでるが、正にその通りだと思う。腹が減っては戦が出来ないし、また『衣食足って礼節を知る』の項では、飯が充分にないために人間の本性があらわになり、団結・規律・士気に重大な影響を与えた事が切実に記されており、糧食

演劇「帰って来た蜚」

の重要性を改めて思い知らされた。現代においては、精神論というものが軽んじられる傾向にあるが、私は決してそうは思わない。あらゆる戦の場において必勝の信念に勝るものはなく、その根底にあるものは、何物にも屈することのない使命感だと思う。その気概があれば、あらゆる困難を打破する方策を導き出すことが出来る筈だと考えている。若林大尉のようにあるべく、使命に対する強い信念を持ち続けることが、重要だと確信した。

後に続く者を信じて散っていった若林大尉や多くの将兵の死を無駄にしないために、我々は一層の努力をしなければならないと思う。」

もう一つ紹介する。戦闘職種の人なら、そのような立場に置かれた時と結び付けて考えられようが、第7師団からもらった綴りの最後は、第7音楽隊長田村茂一尉の一文だった。

「・・・私は恥ずかしながら戦史については精通しておらず、若林東一なる人物についても良く知りませんでした

が、この日記を読み進めるうちに、その人柄と戦に対する考え方が明確に伝わってきました。

特に感銘を受けたのは、部下に対する心構えにある『部下にさからひの気配ある時、弾丸の中にて部下行かざる時、必ず部下を叱るな。おのれの徳未だ足らざるを思え』と書かれた一節でした。今自分自身を振り返ってみると、

自分の徳のなさに気付かず、部下の気持ちも考えず、部隊の前に立っていた自分が、本当に情けなく思えました。

ガ島作戦で想像を絶する飢餓状況においても、部下の事、そして国の事を考えて行動した若林東一の境地にはいつたどり着くか分かりませんが、決意を新たに一歩ずつ日々努力し、自分を磨いていきたいと思えます。」

大抵の幹部は学校教育で習い、若林東一なる名前は知っていたようだが、この本を読んで深い感銘を覚えた、と縷々述懐している。若林も本望だと思

知覧特攻隊員の母と慕われ、戦後は特攻隊員の慰霊と顕彰に生涯を捧げた「特攻の母」鳥濱トメさんの二女赤羽礼子さんと音楽評論家の石井宏氏の共著『ホテル帰る』（草思社刊）を基に、製作総指揮土屋たかゆき都議会議員、脚本・演出柿崎裕治カートプロモーション代表取締役、出演者劇団カートKartの皆さんによる、演劇「帰って来た蜚」が去る6月6日から15日の間、新宿SPACE107で公演され、6月9日に観賞させていただいた。

昨年5月上映された、製作総指揮・

脚本石原慎太郎都知事、主演女優・鳥濱トメ役の岸恵子他で演出された映画「俺は、君のためにこそ 死ににいく」と共通の基盤に立ち、共通の精神を込めて演出されたものであるが、壮大な規模で、莫大な費用を掛けて製作された映画とは、また違った、迫真力のある感動的な演劇であった。客席数三百に満たない小劇場である。出演者の真剣な眼差しと間近に向き合っの演技は観客の心に直接訴えるものがあった。

戦争を知らない若者たちでも、直接知覧の現地を訪れ、「知覧特攻平和会館」で、同年配の若者達が残した遺書や遺詠に触れ、凛々しくもあどけなさの残るその遺影を目にする時、その熱い真情に打たれないはずがない。愛す

る祖国、愛する人のために、身を擲ってこれを護る。大義のために死を恐れず、進んで身を投ずる。それが大和魂というものである。出演者がそれぞれ現地を訪れて、そのような心情的体験を積んで演技に臨んだことにより、迫真の演技に繋がりが、観客に強く訴えるものがあったように思う。また、激しい戦

闘の場面をスクリーンに映し出すなど、効果的であった。

この演劇は、前出の『ホテル帰る』の本の中に出てくる特攻隊第一〇四振武隊隊員宮川三郎軍曹にまつわるエピソード





ソードを中心として構成されている。宮川軍曹は、昭和20年6月6日、九九式襲撃機にて知覧より出撃、沖縄周辺海上で敵艦船に突入、散華したのであるが、その前夜、親友であり、同僚の滝本恵之助伍長と共にトメの経営する富屋食堂にやって来る。その日は宮川軍曹の満二十歳の誕生日であった。トメは心尽くしの手料理で祝うと共に、出撃のはなむけとした。丁度その時、空襲警報が鳴って皆は防空壕に退避した。警報が解除されると、全員藤棚の下の本棚に腰を掛けた。飛び交うホタルを見ながら、宮川軍曹は「小母ちゃん、俺、心残りのことは何もないけど、死んだらまた小母ちゃんのところへ帰ってきたい。なあ、滝本」と言う。トメは「いいわよ、どうぞ帰っていらっしやい。喜んで待ってるわよ」と言った。その時ホタルが川から飛んできて、皆のいる藤棚に止まった。「そうだ、このホタルだ。俺、このホタルになっ

て帰ってくるよ」と宮川軍曹が言うと、トメは「ああ、帰っていらっしやい」と優しく答えた。「明日の晩の今頃、俺と滝本と二人、二匹のホタルになっ

て帰ってくるよ」と宮川軍曹が言う。トメは「ああ、帰っていらっしやい」と優しく答えた。「明日の晩の今頃、俺と滝本と二人、二匹のホタルになっ

翌6月6日の夕刻、富屋食堂に滝本伍長が姿を見た。トメが「宮川さんは？」と聞くと、滝本は黙ったまま、首を横に振った。二人は知覧飛行場を飛び立ったものの、雨で視界が悪く、滝本伍長は宮川軍曹に向かって「引き返す」との合図をした。これに対し、宮川軍曹は「お前は帰れ、俺は行く」と身振りで応答。滝本伍長は二度、三度と帰投の合図を繰り返したが、宮川軍曹はこれに応じず、滝本伍長は、別れの

合図を送って基地へ戻ったのだった。その後、富屋食堂の娘たちは店の電灯に風呂敷を被せて暗くすると、表戸を約束通り開けた。二人の娘がラジオの午後9時の時報を聞いて店に戻り待機していると、そこに一匹の大きな源氏ホタルが明るい光の尾を引きながら入ってきた。「お母さん、宮川さんが帰ってきたわよ」と。娘たちの声で店の奥から出てきたトメは、天井の中央の梁に止まって光を放つホタルを見付



宮川三郎軍曹役の出合正幸さん



鳥濱トメ役の伊藤つかささん

暑中お見舞い
申し上げます

財団法人 特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
法人

- 会長 山本卓真
- 名誉理事 大久保隆
- 理事長 菅原道熙
- 理事 廣嶋文武
- 同 杉山蕃
- 同 藤田幸生
- 同 白田智子
- 同 深山明敏
- 同 笹原幸恵
- 同 栗原宏
- 事務局長 羽淵徹也

財団法人 偕行社

- 会長 山本卓真
- 副会長 斎須重一
- 同 塩田章
- 同 福田一彌
- 理事長 菊地勝夫
- 事務局長 菊地勝夫

財団法人 水交會

- 会長 林崎千明
- 副会長 福地健夫
- 同 杉本光
- 副会長 夏川和也
- 兼理事長 藤田幸生
- 専務理事 池邑正男
- 事務局長 池邑正男

財団法人 海原會

- 会長 前田武
- 専務理事 羽田俊一

航空自衛隊退職者団体
新生つばさ會

- 会長 杉山蕃
- 副会長 村木鴻二
- 同 後藤龍一
- 同 八藤後剛輔
- 同 津曲義光
- 同 杉山弘

けて立ち尽くした。感動した三人が息を殺して見詰めているところに、滝本伍長や他の隊員たちも集まってきた。そして、誰かが言った。「歌おう」と。全員が涙を流し、肩を組み、天井を見上げながら『同期の桜』を斉唱した。

演劇の中心となるストーリーの概要は以上のとおりであるが、それは一例に過ぎず、鳥濱トメさんと長女美阿子さん、二女礼子さんの親子三人と知覧基地の少年兵や特攻隊員達、あるいはその家族達との様々な交流が描き出されておられ、それぞれの心情を思い、胸の熱くなる思いがした。

何よりも「特攻の母」と慕われ、特攻隊員達を親身に世話し、戦後は隊員達の慰霊顕彰に奔走し、知覧特攻平和観音堂の建立などに命をかけたトメさん、そして、母親の遺志を継いで、自身の経験と共に「特攻の語り部」として前記の著作まで残された故赤羽礼子さん、更には、祖母鳥濱トメさんと母親礼子さんの遺志を継いで、鹿児島島の郷土料理の店「薩摩おごじよ」を新宿末広亭前で経営しながら、「特攻の語り部」の役を果たしておられる赤羽潤さん、そしてまた、このような特攻隊員にかかわる演劇や物語を通して純な日本人の心を伝えようと努力と赤心には頭の下がる思いがする。(飯田正能記)

「特攻勇士之像」護国神社奉納運動第一期の終結報告と今後の運動の進め方について

理事長 菅原 道熙

一 愛媛県護国神社に五体目の「特攻勇士之像」奉納

当協会会報第75号の「平成20年度第1回理事会・評議員会報告」の中で(39頁)予告しましたとおり、去る4月4日、愛媛県護国神社に五体目の「特攻勇士之像」が奉納され、その除幕式が、執り行われました。

愛媛偕行石鉄会の呼び掛けに応じて

県下の日本会議、郷友会、隊友会、水交會、海友会の6団体が台座建設費の募金活動を行い、予定どおり建設奉納の運びとなり、「特攻勇士之像」は、護国神社の拝殿に向かって左側に立つ大燈籠の右側に建立され、去る4月4日10時から除幕式が挙行されました。約50名の参列者が見守る中、各会代表6名の手で、幕が引き落とされると、陽光を浴びて燦然と輝くお姿が現れ、参列者一同に深い感銘を与えました。

続く9、10両日の例大祭には、数百名の県下戦没者遺族以下多数の参詣者が訪れ、人々の眼に写った「特攻勇士

「之像」は、改めて特攻戦没者に対する崇敬奉賛の念を深く心に抱かせたものと思えます。

大燈籠の反対側には、宇和島沖で引き揚げられた、零戦52型のプロペラが展示されています。松山の旧海軍三四三空(源田実司令)所属機で、当時頻りに来襲した米軍艦載機の遊撃戦で勇戦し、被弾墜落したものであります。三四三空は、初めは4枚ペラの紫電改2個戦隊編成であったのが、昭和20年2月には3枚ペラの零戦52型の1個戦隊が追加されたこととあります。

この度の奉納で、一昨年同時に铸造された5体の「特攻勇士之像」は、全

て所を得て、第一期の奉納運動は集結いたしました。ここで、もう一度、どのような経緯で運動が始められたのかを振り返ってみたいと思えます。

大阪学芸大学の教職員・学生有志が結成したボランティア団体「日本人の心を伝える会」(以下「伝える会」と略称する。)が、二年掛かりで制作したCD「あ、特攻」の校閲を求めて当協会を訪ねてきたのは、平成17年の秋のこととありました。

このCDは、特攻隊員が共に歌ったであろう軍歌10曲の間に、特攻隊に関する語りを挿入したものであり、何箇所か誤りを指摘しました。彼等はその

時、CDの売上益で特攻勇士の像を制作して、全国の護国神社に奉納したいという壮大な目的を語りました。像のデザインや制作はお手のものでありましようが、肝心の資金や販売に関して、全く具体策を持っていない状態であることが分かりました。

雲を掴むような話で、正直のところ逡巡もありましたが、若者達の志の実現に向けて、全面的に協力すべく決定した次第であります。

発売後直ぐにCDを購入された福井県隊友会の島崎宗雄氏は、県出身戦没者慰霊碑の建立を計画中であったので、この計画を「伝える会」の運動と共同で進められないか、と申し入れて来られました。双手を挙げて賛成いたしました。そのことでこの運動に弾みが付くことになりました。

その結果、鹿児島(平成19年4月12日)、福井(平成19年4月13日)、宮城(平成19年10月22日)、愛媛(平成20年4月4日)の各護国神社並びに世田谷山観音寺(平成19年9月23日)と短期間に5体の像を奉納することができました。これは、望外の慶事でありました。

CDは約3500枚、ミニチュア「特攻勇士之像」は約170体売り上げて、第一期の運動は「伝える会」が考えたとおりに事は運んで、成功裡に終

結いたしました。

しかしながら、CDの売上上げは時の経過と共に減少し、これ以上引き続き像を奉納できるのか、明るい前途を見出し得ないのが、偽らざる現状であります。

二 「特攻勇士之像」が問い掛けるもの

特攻の史実と精神を後世に継承して行くために、当協会が「特攻隊慰霊顕彰会」であった時代の平成元年に、「特別攻撃隊を上梓して以来4版を重ね、その都度補正を行って参りましたが、この度、その集大成として、『特別攻撃隊全史』を刊行することになり、今年の8月15日には発行される予定であります。

後世に特攻の全貌を伝えるものとして、本書の右に出るものはないと思われませんが、内容が学術書であり、重厚な図書としての性質上、広く一般人々に読まれ難いであろうことは、止むを得ないものと思えます。

一方、全国の護国神社の境内に「特攻勇士之像」が建立されるならば、像は無言のうちに、「特攻とは」を永久に人々に問い掛けて下さいます。

「特攻」という史実、その行為の基になった「日本人の心」は、これから



愛媛県護国神社奉納「特攻勇士之像」



同神社境内の零式艦上戦闘機52型のプロペラ

益々複雑多様化していく国際情勢の中で、日本人が民族としての矜持を失わず、独立国家としての尊厳を堅持し、毅然として生き抜くためには、絶対に必要なことであることを、人々に気付かせて下さることでありましょう。

三 今後の運動の進め方

当協会は、平成5年に、基本財産1億円で財団法人化されました。設立以来数次にわたって、寄付金・繰越金を繰り入れて、現在の基本財産は、ほぼ2億5000万円になっております。本年度も、繰越金のうち1500万円を基本財産に繰り入れる予算を計上いたしました。これを「特攻勇士之像」奉納運動に振り替えることの可否に付いて、厚生労働省に質しましたところ、他の事業と明確に区分して管理されるならば、差し支えないとの意向が示されました。そこで急遽、方針を変更することに、理事会・評議員会で決定いたしました。

4月末には、山本会長から全国52の護国神社宮司(既納の4社を含む)に、この旨の報告と御協力をお願いする書状を発送いたしました。

この運動は、台座の建設は地元の奉賛団体の御協力を得ることを前提としております。靖国神社からは、護国神

社それぞれの事情から、「特攻勇士之像」の受入れに必ずしも積極的でない所もあると聞き及んでおりますので、会員の皆様には、よく地元護国神社の意向を察知されますようお願い申し上げます。

なお、本運動を進めるに当たっては、全面的に靖国神社の御指導と御協力を仰いで参ります。

四 結び

春の全国護国神社会同の席上で、靖国神社から、像の奉納運動について当協会の新方針の説明が行われた際、その場で、栃木、茨城、山梨、大阪、山口の5県の護国神社宮司から受入れの意向が表明されたと、山口権宮司から報告がありました。

また、群馬県護国神社宮司からは、地元奉賛会会長(県郷友会会長)に、当協会会長から書面が届いた旨の話があつて、県の護国神社奉賛会では直ちに募金への活動を開始した模様であります。

鹿児島と宮城では、除幕式を例大祭に間に合わせるために、自ら台座を建設されました。このように、各県の護国神社すべてが一樣ではないことを、心しておかなければならないと思つます。各位におかれましては、以上の経緯

をお含みの上、旧軍関係会員の行動力が喪失するまでにそう余裕のない現在、一体でも多くの「特攻勇士之像」が、全国の護国神社に建立されるよう御尽力を賜りたいと、心からお願ひ申し上げます。

お知らせ

理事長 菅原 道熙

一 第57回特攻平和観音年次法要について

例年通り本年も9月23日に世田谷山観音寺において、特攻平和観音年次法要が執り行われます。その詳細につきましては、同封の案内書に記載しておりますので、お申し込みの上、ご参加くださるようご案内申し上げます。

二 『特別攻撃隊全史』の刊行について

当初の見込みから1年余り遅れましたが、鋭意編纂中であつた『特別攻撃隊全史』が、いよいよ来る8月15日に刊行される運びとなりました。第一部は「特別攻撃隊五訂版」として、従前の四版に大幅な追加補正を加え、第二部には、戦艦大和以下第二艦隊の沖繩

作戦を始め、「陸海軍準特攻戦没者名簿」を収録しましたので、従前の『特別攻撃隊(四版)』に比べ約百頁増の大冊となっております(刊行に至る経緯、主要改訂点、準特攻戦没者の内訳等については会報「特攻」第74号51頁を参照してください)。

大東亜戦争の末期に敢行された苛烈、かつ崇高なる特攻作戦の全貌を後世に伝える史料として、これに勝るものはないと考えますので、是非お申し込みいただきたく、また、会員のみなならず、お知り合いの方々にもお薦めいただきたくお願い申し上げます。

三 世田谷山観音寺住職の交代について

先代の太田陸賢和尚様が昭和30年5月24日に遷化されて以来今日まで、53年余にわたり「特攻平和観音」を護持して法要を続けて来られた太田賢照和尚様には、来る9月23日の「第57回特攻平和観音年次法要」を機として同時住職を勇退され、後任には御長男の太田兼照和尚様が就任されます。

賢照和尚様の長年の御奉仕並びに御教導に対し衷心より感謝の意を捧げますと共に、今後ともよろしく御教導並びに御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

四 CD「あ、特攻」の再販売について

以前から紹介して参りましたCD「あ、特攻」は、好評につき在庫が無くなっていました。この程追加作製されましたので、御希望の方は、この機会にお申し込みください。

人も羽測事務局長が担当いたします。

事務局からの報告等

寄附者御芳名 (敬称略)

(平成20年4月1日～6月30日)

(単位千円)

一〇〇 中台不動産株式会社

三〇 栗原 宏 一〇 細谷 輝彦

一〇 降矢 達男 七 岡田 豊

二 武藤 一彦 二 豊岡 久

二 梅澤 正造 二 佐々木ひろ子

二 難波 寿邦 二 大島 吉郎

一 寺澤 英俊

御芳志誠に有り難うございました。

新入会員名簿 (敬称略)

(平成20年4月1日～6月30日)

岩手県 及川 昭男

東京都 茂木 弘道 森川 俊秀

東京都 柄山 直樹 倉形 寛

茨城県 笠井 湧二

茨城県 北澤 修

埼玉県 金子 治 川上 潔

埼玉県 鈴木 直人

愛知県 岩月 仁志

石川県 城ヶ端 専

山口県 原野 健志

香川県 鹿谷 徳一

福岡県 田村 豊彦 永野 陽子

六 事務局長の交代について

去る6月1日付けで事務局長に羽測徹也(空自OB、防大十四期)が就任しました。前任の栗原 宏は常任理事専任となります。これに伴い、本会報発行

会員訃報 (敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

宮崎県 江尻 瑛 (19・3・)

長野県 平出 健 (19・6・1)

熊本県 小栗 一利 (19・8・2)

香川県 山下玉太郎 (20・1・28)

東京都 叶 茂光 (20・3・8)

東京都 藤田平三郎 (20・3・10)

静岡県 山本 陽一 (20・5・)

会報「特攻」第74号正誤表

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

(訂正箇所)

第74号

12頁 3段目20行目(再訂正)

誤 「加良須基地」↓「香良須基地」

正 「香良洲基地」

「ご投稿について」のお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。

2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。

3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません。必要の場合、その旨お書き添えください。

5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当協会事務局宛とさせていただきます。

記

〒105-0014 東京都港区芝2-5-19 TAビル4階

(財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会事務局

電話 03-5730-1016

FAX 03-5730-1017